

平成 20 年 11 月 29 日

明日香村教育委員会

明日香村発掘調査報告会

2008

開 会 1:00～

調査報告 1:10～ 「真弓籙子塚古墳の調査」 西光 慎治

「檜隈寺跡周辺の調査」 長谷川 透



講演 2:50～

「飛鳥の渡来人と檜隈寺」

講師 木下 正史 氏

明日香村文化財顧問

東京学芸大学特任教授

真弓鐘子塚古墳(2007-5次)調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字真弓

調査原因：範囲確認調査

調査面積：約 200 m²

調査期間：2007年7月9日～2008年3月31日

はじめに

真弓鐘子塚古墳は越峠付近から北西に伸びる丘陵の先端に築かれた後期古墳である。周辺にはカンジョ古墳や与楽鐘子塚古墳など穹窿状の横穴式石室を有する古墳が点在しており、またミニチュア炊飯具など渡来系と考えられる遺物がスズミ1号墳や与楽古墳群、白壁塚古墳などからも出土している。この地域は石室構造や出土遺物などから渡来系氏族東漢氏の墓域と考えられている。

真弓鐘子塚古墳については明治時代にウイリアム・ゴーランドが来跡しており、石室内の計測が行われている。大正12年には高市郡役所から『高市郡古墳誌』が刊行され、その中で「・・石槨の中央に大なる玄室を有し、前後には何れも東側壁に接して各一個の羨道を有し、もと北方だけ僅に匍匐して内部に潜入り得べき口を開いてあったが、大正2年8月15日奈良縣史蹟調査會から之を發掘した故に、現今は両口開いて居る・・」と記されている。昭和37年には末永雅雄氏を中心とした後期古墳研究会によって石室内を埋め尽くしていた土砂が搬出され、石室内の実測調査等が行われている。そして今回、真弓鐘子塚古墳の重要性を鑑み、全貌解明に向けた範囲確認調査を実施している。

検出遺構と出土遺物

【墳 丘】

北西に伸びる丘陵を大きく造成し、岩盤を削り出して盛土を行っている。墳丘規模は直径約40m、高さ約8mの二段築成の円墳と考えられる。

【埋葬施設】

貝吹山周辺で採れる石英閃緑岩の巨石を用いた穹窿状の横穴式石室である。石室規模は玄室長約6.5m、幅約4.4m、高さ約4.7m、羨道長約6.5m、幅約2.2m、高さ約2.2m、奥室長約7m、幅約2m、高さ約2.5mを測る。石室床面には幅約30cm、深さ約7cmの排水溝が設けられている。石室の平面プランについては石室の東壁が直線的で、西壁側に約2m分張り出した片袖式の構造となっている。また玄室から続く北側には奥室が設けられている。石室の壁面構成は巨石を6～7段積み上げ、3段目以降は急激な持ち送り(穹窿状)となっており、天井石は巨石3石を架構している。羨道部分では拳大から人頭大の石を用いた閉塞石を検出している。閉塞石は残存高約80cmで、南北の長さ約3mを測る。

【地震痕】

墳丘の北側と南側にかけて地滑り跡を確認している。また玄室床面にも複数の亀裂が走っており、側壁の一部にも亀裂が生じている。このような地滑り等を誘発した背景には南海地震の影響が考えられる。

【出土遺物】

土師器(ミニチュア土器)、須恵器、銀象嵌刀装具、玉類、金銅製飾金具、金銅製馬具、鉄鏃、鉄釘、凝灰岩片などがある。

まとめ

今回の調査は真弓罐子塚古墳の本格的な調査となり、以下、調査成果をまとめると

- ① 墳丘は北西に延びる丘陵を大規模に造成して築かれた直径約 40m、高さ約 8 mの円墳である。
- ② 埋葬施設は石英閃緑岩の巨石を使用した穹窿状の横穴式石室である。
- ③ 石室の平面プランについては玄室北側に奥室機能を有する。
- ④ 石室規模については玄室床面積が約 28 m²(18 畳分)を測り、石舞台古墳をしのぐ規模を誇る。
- ⑤ 築造年代については石室内から出土した土器などから 6 世紀中頃と推定される。
- ⑥ 羨道の閉塞石の状況等から数回の追葬が考えられる。
- ⑦ 追葬時期は 6 世紀後半頃まで行われている。
- ⑧ 棺構造については凝灰岩片や鉄釘が出土していることから石棺と木棺の存在が考えられる。
- ⑨ 墳丘と石室部分には南海地震の影響と考えられる亀裂や大規模な地滑り跡も明らかとなった。

以上、真弓罐子塚古墳については飛鳥地域でも大型の横穴式石室であることが再確認されるなど今後、飛鳥の後期古墳を考える上で重要な資料となるだろう。

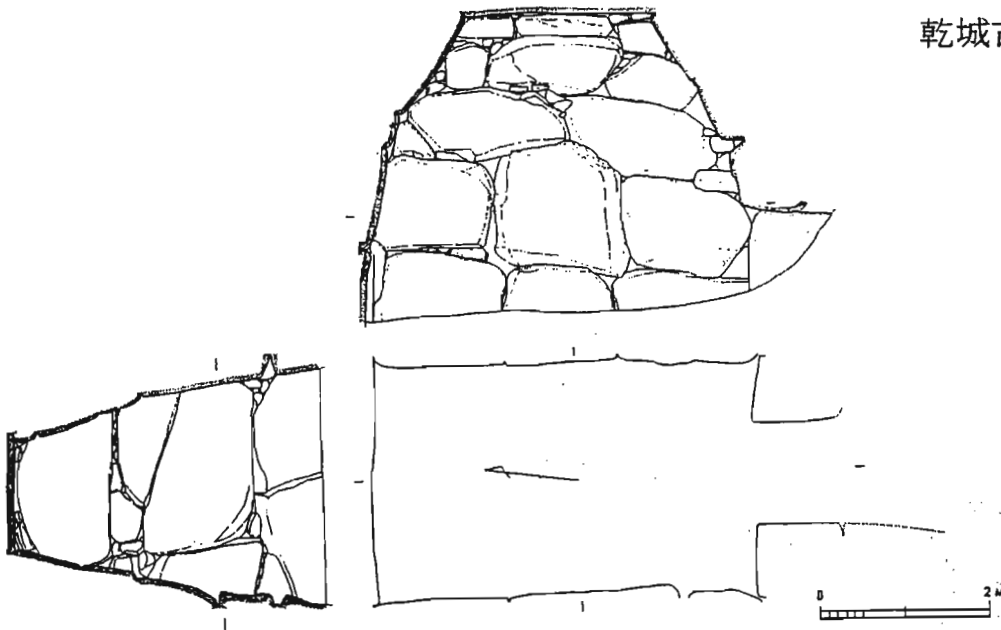
【メモ】





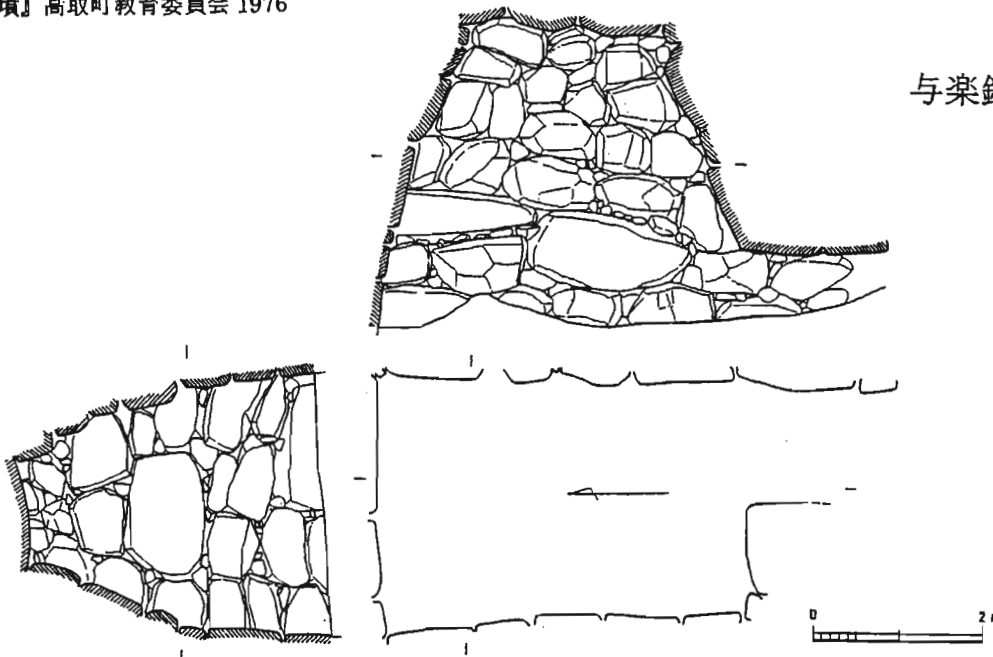
真弓鐘子塚古墳調査位置図

乾城古墳



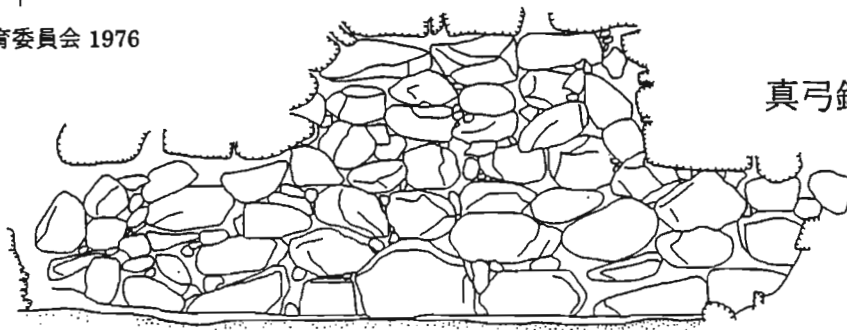
『高取町の古墳』高取町教育委員会 1976

与楽罐子塚古墳



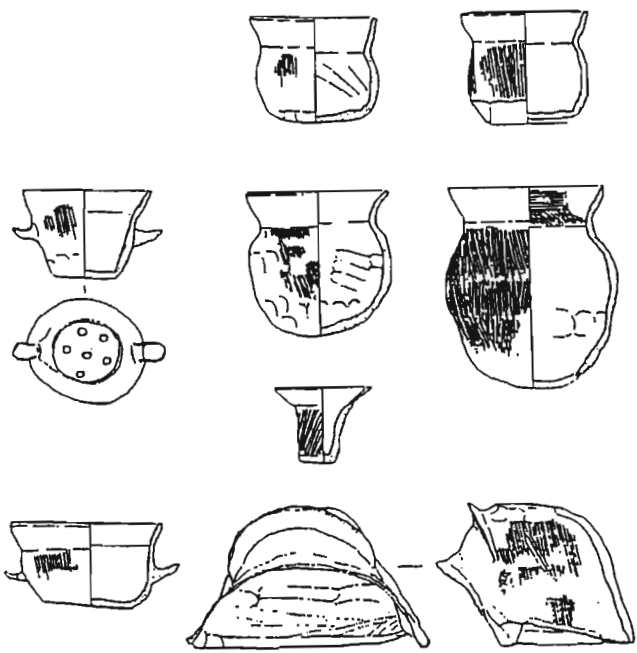
『高取町の古墳』高取町教育委員会 1976

真弓罐子塚古墳

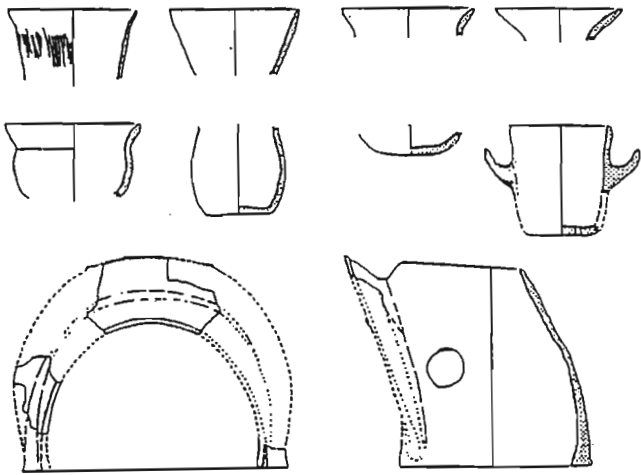


『明日香村史』明日香村史刊行会 1974

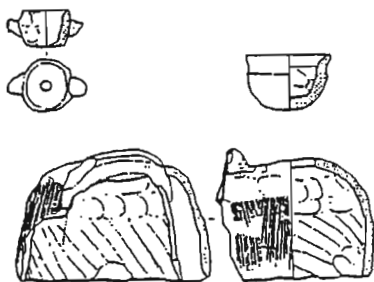
貝吹山南麓の穹窿式横穴式石室



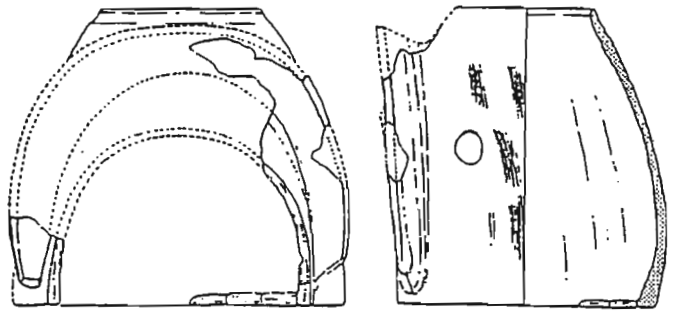
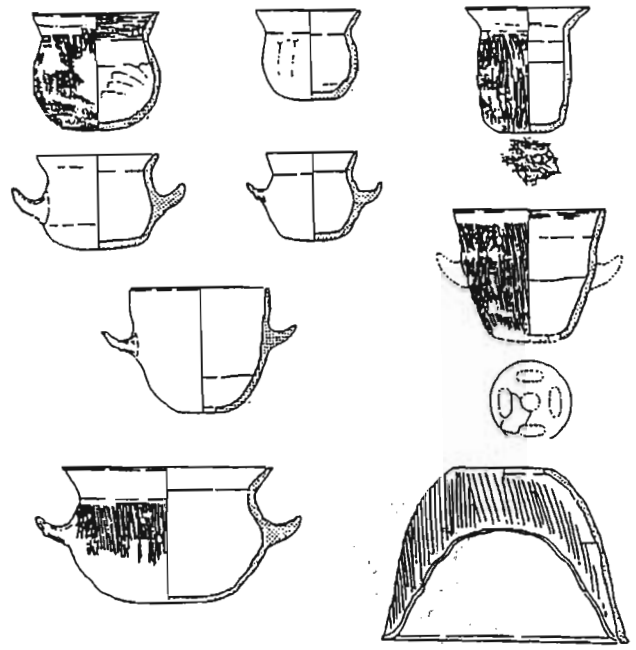
ナシタニ1号墳



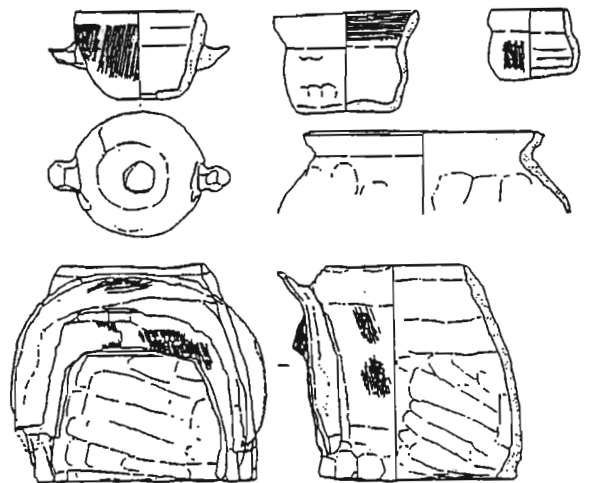
ナシタニ2号墳



ナシタニ5号墳

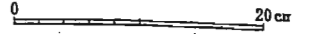
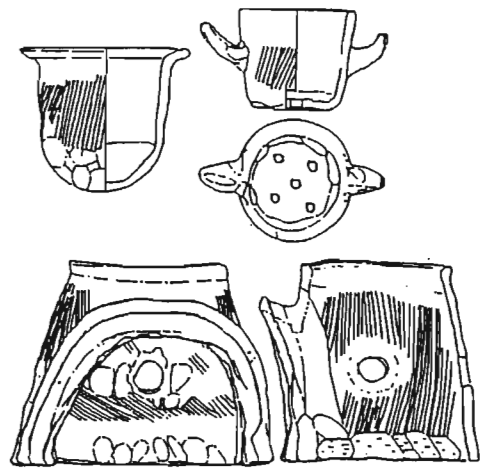
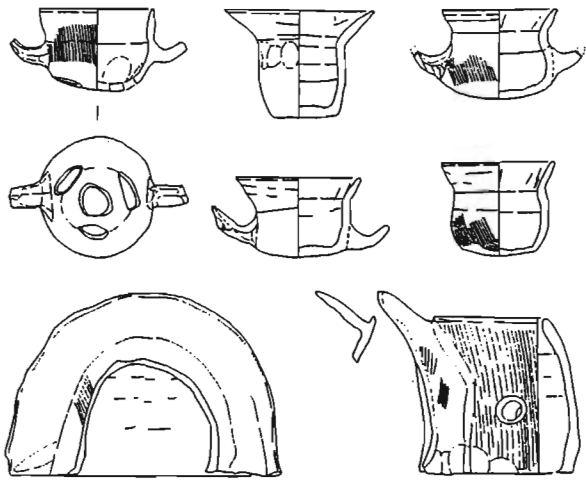


ナシタニ6号墳

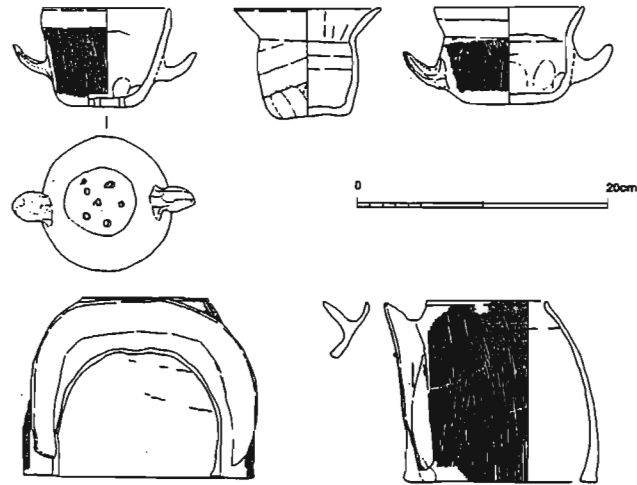


ヲギタ2号墳

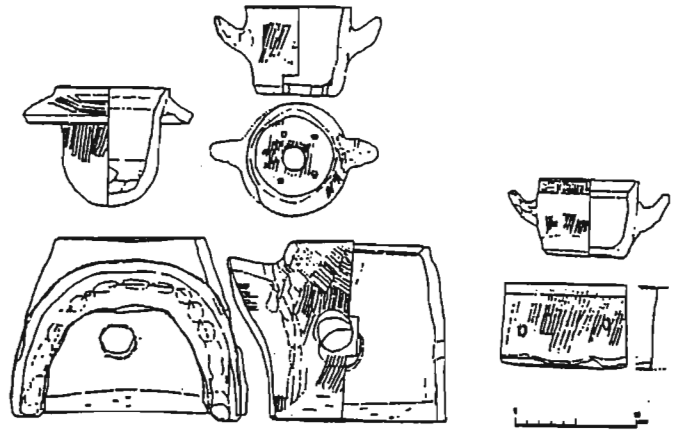
ミニチュア炊飯具集成①



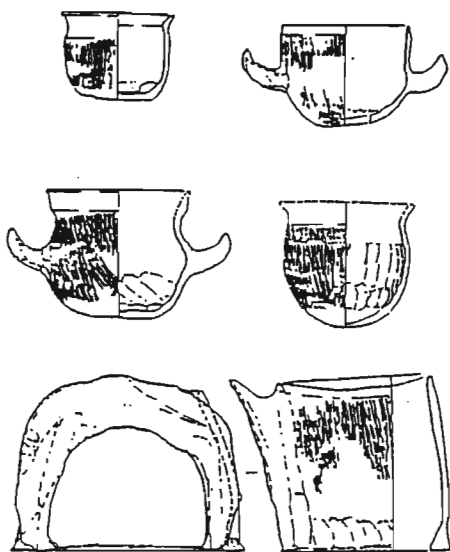
オイダ山古墳



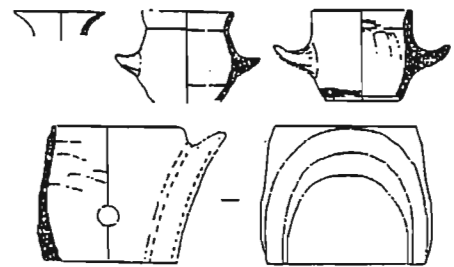
上 5 号墳



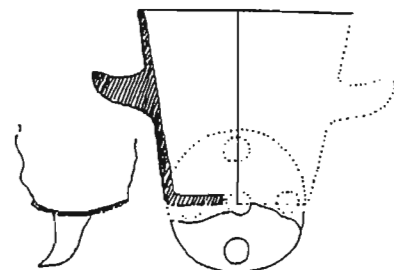
笛吹遊ヶ丘古墳

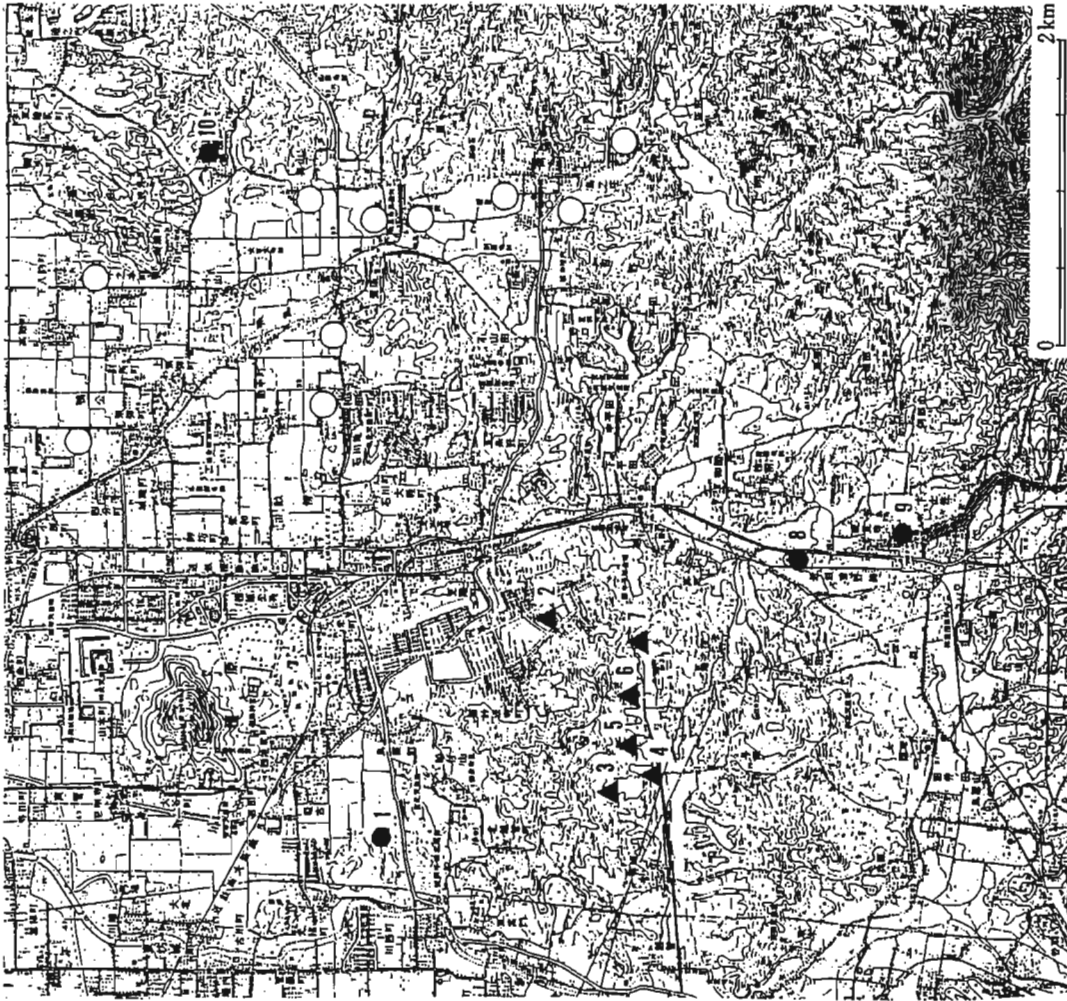


沼山古墳

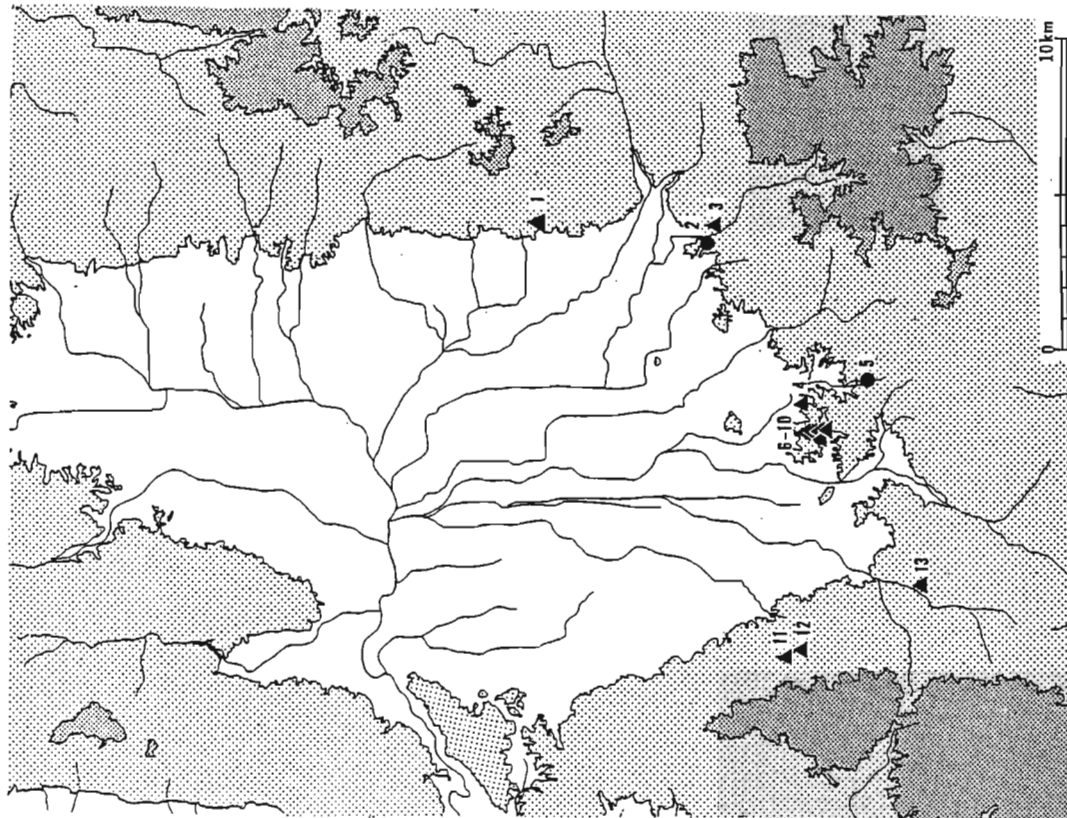


勘定山古墳





飛鳥地域の渡来系の古墳と朝鮮系土器出土地
 (● 5世紀の古墳 ▲ 6世紀の古墳 ○ 朝鮮系土器出土地)
 1 新沢126号墳 2 沼山古墳 3 与楽鍾子塚古墳 4 乾城古墳
 5 フキタ2号墳 6 与楽古墳群ナンタニ支群 7 真弓鍾子塚古墳
 8 坂ノ山4号墳 9 稲村山古墳 10 南山4号墳



大和の小型炊飯具分布図 (位置不明, 枠外は除く。● 5世紀 ▲ 6世紀)
 1 珠城山1号墳 2 桜井児童公園2号墳 3 浅古 4 沼山古墳 5 稲村山古墳
 6 ナシタニ5号墳 7 ナシタニ5号墳 8 ナシタニ2号墳 9 ナシタニ1号墳
 10 フキタ1号墳 11 寺ロ・忍海古墳群 12 笛吹遊ヶ岡古墳 13 オイタ山古墳
 (関川尚功「古墳時代の渡来人」『橿原考古学研究所論集』第9 権考研編 1985より転載)

檜隈寺跡周辺の調査

明日香村教育委員会

調査地 : 奈良県高市郡明日香村大字桧前・阿部山・大根田

調査原因 : 国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備事業にともなう事前確認調査

調査面積 : 約 3000 m² (11 月現在の総面積)

調査期間 : 2007 年 10 月 26 日～2008 年 3 月 31 日、4 月 30 日～現在継続中

はじめに

明日香村教育委員会は、昨年度から国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備事業に伴い、事前確認調査を実施している。

昨年度から現在まで、檜隈寺跡が立地する丘陵の北側周縁地(A・B区)とキトラ古墳の北西部から北西へ派生する2本の谷筋(C・E区)とその谷筋に挟まれた尾根筋(D区)と調査区を設け、継続的に調査を行っている。今回、その中のA区(檜隈寺跡)とD区(檜前遺跡群)において顕著な遺構、遺物を検出した。

檜前遺跡群の調査

檜前遺跡群はキトラ古墳の北で分岐する丘陵のひとつ、北西に延びる尾根筋の平坦部に位置する。檜隈寺金堂跡から南に200m、キトラ古墳から北西に450mに位置する。調査区は東西80m、南北は最大で10mに設定し、調査面積は580m²である。

【主な検出遺構】

建物1 南北2間×東西5間の掘立柱建物である。柱掘形は70～80cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径20cmを測る。柱間は心々で南北150cm、東西150cm。東3間と西2間を分ける位置に間仕切りの柱穴を検出した。

建物2 南北2間×東西5間の掘立柱建物である。柱掘形は90～100cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径20～25cmを測る。柱間は心々で南北180cm、東西210cm。建物の内部には掘形が50～60cmと小さい柱穴を伴うことから、床張りの建物であったと考えられる。柱穴の切りあい関係から建物3より古い。

建物3 南北2間×東西4間の掘立柱建物である。柱掘形は70～80cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径15～20cmを測る。柱間は心々で南北180cm、東西180cm。柱穴の切りあい関係から建物2と建物4より新しい。

建物4 南北1間以上×東西3間の掘立柱建物である。柱掘形は90～100cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径20cmを測る。柱間は心々で南北180cm、東西180cm。建物北側には東西柱列に平行して60～70cmの掘形が並ぶ。これは庇と考えられる。柱穴の切りあい関係から建物3と建物5よりも古い。

建物5 南北2間以上×東西2間の掘立柱建物である。柱掘形は80～90cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径20cmを測る。柱間は心々で南北210cm、東西150cm。柱穴の切りあい関係から建物4より新しい。

塀1 調査区の西にある2間以上の掘立柱塀である。柱掘形は70～90cmの隅丸方形もしくは楕円形を呈し、柱痕跡は径20cmを測る。柱間は210cmを測る。2間以上の塀となる。

塀2 調査区の東にあるL字形に折れる掘立柱塀である。柱掘形は60～80cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径20cmを測る。柱間は180cmを測る。東西に2間以上、南北に2間以上の塀である。

建物方位と柱掘形規模からみて、これらの建物群は3つに分けることができる。第1は柱掘形が90～100cmの建物2と建物4と塀2である。第2は柱穴規模が70～90cmの建物1と建物3である。第3は柱穴規模が80～90cmの建物5と塀1である。建物方位と柱穴の切りあい関係からみて、第1から第3の順で建て替えられたと考えられる。

【出土遺物】

調査区から土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などが出土した。飛鳥時代から中世にわたって幅広い年代の遺物が出土したが、全体的に少量である。そのなかでも、土器は7世紀半ば頃から8世紀前半代を中心に出土した。

【檜前遺跡群のまとめ】

今回の調査では、檜隈寺の南方地域で飛鳥時代後半から奈良時代前半を通じて存続した掘立柱建物群をはじめ検出した。これらの掘立柱建物群は地形にあわせ、3時期の建て替えをしていることがわかった。調査地は、檜隈寺から谷を隔てて200mの位置にあり、瓦や寺院に関わる遺物が出土しないことから、檜隈寺に直接関わる施設とは考えにくい。今回検出した掘立柱建物群には床張り建物や間仕切り建物などがあることから、居宅の一部であった可能性が高い。当遺跡地は檜隈寺を造営したとされる東漢氏との関わりが強い地域であり、これらの建物群は東漢氏にかかわる施設であった可能性が考えられる。

檜隈寺跡出土小金銅仏片

【調査区の概要】

小金銅仏片は檜隈寺跡講堂から北西70mにある調査区から出土した。調査区は昨年度の成果を得て、今年度は拡張して調査した。調査面積はあわせて313㎡である。遺構は中世の小溝を検出したのみである。小金銅仏片は中世の遺物包含層から出土した。その他の出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、瓦、刻書瓦がある。調査区は檜隈寺が立地する丘陵の西から北西に伸びる谷筋の谷頭に位置し、寺跡から地形的に一段下がった場所である。この谷は伽藍の直ぐ北にせまるもので、中世以降の檜隈寺廃絶やその後の造成によって、土砂の堆積とともに遺物が廃棄、再堆積したものと考えられる。

【小金銅仏片】

小金銅仏片は右手首から指先まで遺存する。人差し指、中指、小指を折損するが、遺存状態は良好である。親指は上方にまっすぐに伸び、薬指は前方へ少し曲げる。長さ 23 mm、幅 10 mm、厚さは手の甲で 5 mm を計る。印相や手の位置は不明であるため像形は不明。

銅に鍍金を施す金銅製。蛍光 X 線分析によると、銅地はほぼ純銅。表面の鍍金は Au が約 83% 以上あり、水銀も微量に含む。金の発色はたいへん良く、青みがかかる。金の発色の良さは中国や韓国などで見られる小金銅仏と大変似通っているが、舶来かどうかが断定は困難である。

指の付け根部分にはシャープな彫りこみがみてとれる。これは鋭角のタガネで指を 1 本 1 本彫り出して表現しているためである。このように、指の輪郭を彫り出すことによって指の断面形が四角形状に角張る。本例は断片であるため、決め手となる情報が少ないが、こうした特徴は 7・8 世紀（飛鳥時代から奈良時代）の小金銅仏に認められる技法である。

小金銅仏片が出土した地点から南西へ 50m ほど離れた所で、中世の小溝から金銅製の光背飛天像片が出土している（奈良国立文化財研究所 1987『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 17』）。この飛天像片は、594 年製作と考えられている法隆寺献納宝物甲寅年銘光背との近似から、中国北魏後半期の製作とみられ、6 世紀代に遡ると考えられている。この 2 点が檜隈寺から距離的に近く、近接して出土することから、檜隈寺に伴う遺物であろう。しかし、この 2 点は推定される製作時期に隔たりがあり、この 2 点が同一の像形をなすかどうかは今後の検討を要する。

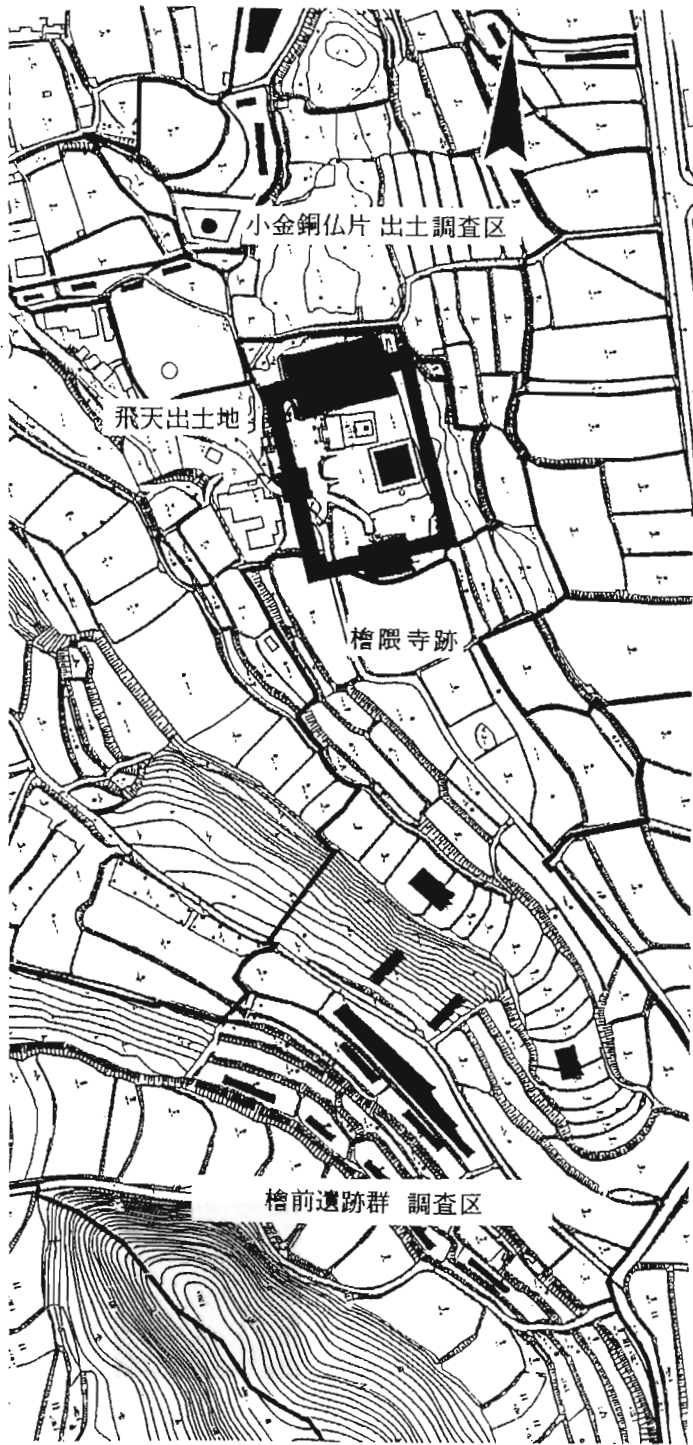
【出土瓦】

大量の瓦片が出土した。軒丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦も数点出土した。現在のところ、軒丸瓦には檜隈寺式、藤原宮式、I B 型式などを確認している。刻書瓦は 2 点出土した。ともに檜隈寺 II C 型式の軒丸瓦で、瓦当裏面に「吳」とヘラ状工具で刻書している。今後の整理に期待される。

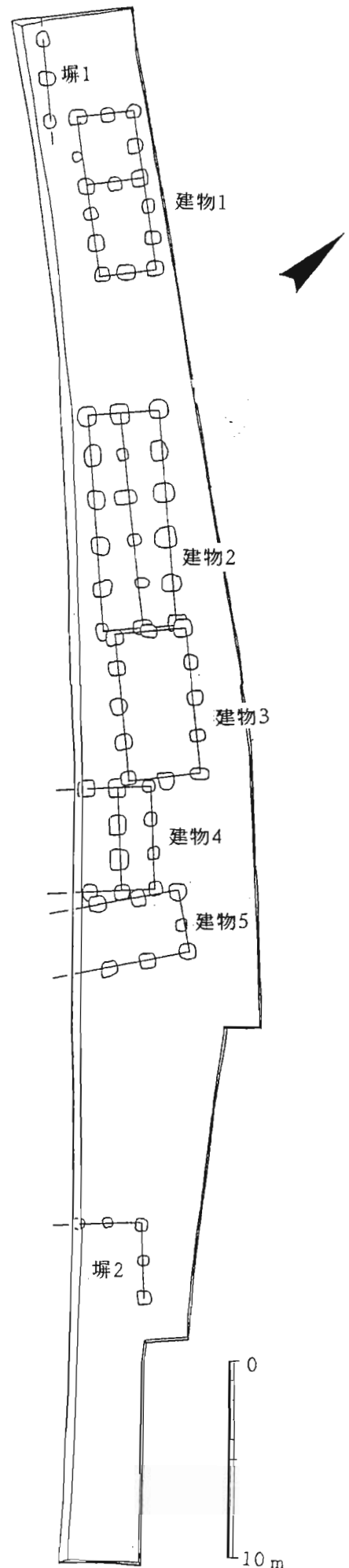
まとめ

今回の調査によって、檜隈寺周辺における居住を伴う土地利用状況の一端を明らかにすることができた。今後の調査の積み重ねと遺跡の面的な把握によって檜隈寺と寺院をとりまく周辺の景観を復原が可能となるだろう。

また、今回出土した小金銅仏片は、白鳳・天平文化の造形と推定されるが、これは檜隈寺の伽藍が最も整備され、東漢氏の全盛期にあたる。また、近接して出土した金銅製飛天像片は 6 世紀代にさかのぼるとされ、仏教伝来の初期の遺品といえる。檜隈の地を本拠地とした渡来系氏族である東漢氏は、蘇我氏と結びついて政治、外交、軍事面に貢献したとされ、渡来系の技術や仏教文化の流入に深く関わっていたと考えられる。このように小金銅仏片と飛天像片は初期の仏教信仰を物語る資料といえるだろう。



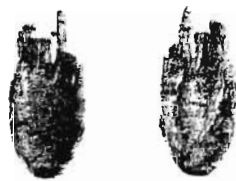
調査地位置図 (S=1/3000)



檜前遺跡群 遺構略測図



飛天像片
(昭和61年奈文研調査時出土)



小金銅仏片
(実物大)

講演

「飛鳥の渡来人と権限寺」

**明日香村文化財顧問
東京学芸大学特任教授**

木下 正史 氏

◇飛鳥の渡来人と桧隈寺◇

2008.11.29

木下正史

A、はじめに

- 1、6世紀末～8世紀初頭の約120年間：宮都は飛鳥とその周辺に集中。
 - 1) 飛鳥・藤原地域：政治・経済・文化の中心地として繁栄。
 - 2) この時代：宮都の所在地に因んで飛鳥時代と呼ぶ。
 - 3) 同時代の政治・文化等：列島内でのみ自生したのではなく、東アジア世界と深いつながりを持つ、真に国際性豊かなものとして成立・展開。
- 2、その形成や内容・特色を明確にするには：
 - 1) ①渡来人、②渡来人と結んで権勢を誇った蘇我氏、③遣隋使・遣唐使、が果たした役割を考えることが重要。

B、飛鳥への渡来氏族の集住と開発

- 1、渡来人：渡来時期や渡来理由によって性格が異なり、それによって飛鳥文化の形成に果たした役割にも違いがある。
 - 1) 渡来人を大きく区分：①5世紀前半頃渡来の「古い渡来人」、②5世紀後半以降渡来の「新しい渡来人」、③百濟滅亡時の「百濟亡命渡来人」に分けて考える必要。
 - 2) 応神20年9月、東漢(倭漢)氏の祖・阿知使主と、その子の都加使主が渡来し、大和国高市郡檜隈郷の地を与えられた(『日本書紀』。以下、「紀」と略す)。
 - ①5世紀前半頃：朝鮮半島南部から東漢氏一族が渡来して、飛鳥南西部の檜隈周辺に住み着いたのだろう。
 - 3) 古墳時代前期の飛鳥：大型古墳がない。有力豪族の拠点となっていなかった。荒涼たる原野であった。
 - ①こうした状況：渡来人の定住や蘇我氏の進出を許し、
 - ②1世紀後：飛鳥文化が華開く基を開いた。
 - 4) 飛鳥とその周辺の開発：
 - ①一帯：灰褐色土壌や、黄褐色土壌が卓越した地域。乾燥土壌。
 - ②この地域の開発：乾田農業をもたらした渡来人によって、始めて可能になった。
- 2、東漢氏：「古い渡来人」の代表的存在。血縁関係のない中小の渡来氏族集団の総称
 - ①彼ら：灌漑用溜池を作り飛鳥西南方の檜隈、見瀬、軽の地などの開発を進めた。
- 3、渡来氏族の姓：「史」「村主」。
 - 1) 雄略2年紀10月条：「史戸…を置く。…天皇…寵愛するところは、史部の身狭村主青、桧隈民使博徳等なり」とある。
 - ①「史」姓：5世紀後半には整備されたのだろう。
- 4、東漢氏の活躍：高度な知識・技術を備え、ヤマト政権の文筆や外交の仕事を世襲し財政、軍事、土木、馬の飼育、手工業などに携わり活躍。

C、百濟から新らしく渡来した「今来才伎」

- 1、雄略紀7年是年条：百濟から新たに漢人の陶部(すえつくり)高貴、鞍部(くらつくり)堅貴、画部因斯羅我(えかまゐらが)、錦部定安那錦(にしじりょうあなこん)、訳語卯安那(おさあんな)ら渡来
 - 1) 天皇は東漢直掬(つか)に命じて、彼らを河内国から上桃原・下桃原と真神原に移す
 - ①彼ら：飛鳥の上桃原・下桃原・真神原に置き、東漢直掬に管理させた。
 - ②彼らの配置と後述の韓式土器の分布：重なる。この記事は史実をある程度反映。
 - 2) 雄略16年：東漢氏は、多くの漢部の伴造に任命され「直」姓を賜る(「紀」)。
 - 3) 須恵器・馬具・画・錦の製作や通訳等に優れた技術・才能を持つ新来の人々：東漢氏の指揮下に編入され、

- 4) 漢人として：陶部・鞍部・画部・錦部、金作・甲作・鞞作・弓削・矢作など多くの漢部を直接指揮、監督する任務に当る。
 - ①彼ら：「今来才伎」「今来漢人」と呼ばれた。
- 5) 大化以前の大陸系技術：東漢氏－漢人－漢部の指揮系統に属するものが多い。
- 2、考古学的成果に見る渡来人の飛鳥定着：5世紀後半の渡来人の集住に関わる遺跡。
 - 1) 飛鳥盆地とその周辺：明日香村島之庄から橘・飛鳥・豊浦・奥山にかけて、また橿原市の和田、香久山西方一帯、高取町観覚寺などに居住したらしい。
 - ①韓式系土器が出土する5世紀後半以降の集落遺跡：これら地域に濃密に分布。
 - 2) 南山古墳群：盆地東北方の丘陵上。5世紀後半。騎馬人物飾付き角杯・連環壺などの陶質土器、鉄鋌などを副葬。
 - 3) 飛鳥南方の高取町清水谷遺跡(5世紀後半～)や観覚寺遺跡(6世紀)：オンドル付きの「大壁作り」建物や陶質土器・韓式系土器を発見。
- 3、渡来氏族の後期古墳：
 - 1) 分布：飛鳥西方の丘陵に造営。沼山古墳・真弓罐子塚古墳・乾城(かんじょう)古墳などの巨石墳や与楽(ゆうらく)古墳群などがその候補。
- 4、6世紀：渡来人の文化的活動に大きな変化。
 - 1) 少なくとも6世紀後半以降：東漢氏など「古い渡来人」の知識・技能は旧式化。
 - 2) それに代わって：「新しい渡来人」が重用されるようになる。
 - 3) 代表：「今来漢人」や王辰爾一族、王辰爾一族から分かれた船史、白猪史、津史。
 - 4) 王辰爾一族：高い知識を備え、文筆、外交、交通、屯倉の経営で才能を発揮。
 - 5) 白猪宝然や船史恵尺、その子の道昭など：外交、政治、仏教界など多方面で活躍

D、蘇我氏の登場と渡来人

- 1、蘇我氏の飛鳥進出：東漢氏と結びついて飛鳥に進出。
 - 1) 蘇我氏：飛鳥文化の形成を考える上で極めて重要。
- 2、蘇我氏の政治の表舞台への登場：宣化天皇即位時(536年)、蘇我稻目大臣となる。
 - 1) 稲目：欽明31年(570)に死去するまで30余年の長きにわたりヤマト政権の外交・財政を担当し、急速に勢力を伸張して蘇我氏の権力基盤を整えた。
 - 2) 稲目の子・馬子、孫・蝦夷：大臣となり、政治権力を掌握。
- 3、稲目が権力を強大化した主な理由：
 - 1) 外交政策：百済との関係を一段と強化した外交政策。
 - 2) ヤマト政権の財政基盤の確立：財政担当者として児島屯倉・白猪屯倉、大身狭屯倉・小身狭屯倉の屯倉経営に新しい方式を採用。ヤマト政権の財政基盤を確立
 - 3) 仏教受容：積極的に受容。
 - 4) 外戚としての権力：娘の堅塩媛と小姉君が欽明妃となり、外戚として権力を発揮
- 4、新羅や高句麗から圧迫を受けていた百済を支援する外交政策：その結果、仏教や五経博士など新しい知識・知識人が伝来・渡来し、百済文化が従来に増して流入。
- 5、東漢氏や今来漢人等の渡来人：蘇我氏の下で外交・財政面の実務、軍事等を担う。
- 6、蘇我氏の本拠地：畝傍山西方の曾我川中流域の高市県蘇我里。
 - 1) 6世紀中頃：稲目は拠点畝傍山東南方の軽の地に移し、軽曲殿を構える。
 - ①やがて飛鳥川付近に：小墾田家や向原家を営む。
 - 2) 馬子：軽の近傍に石川家、槻曲家を造る。
 - ①一方：飛鳥盆地内に進出。真神原に飛鳥寺を建立し、桃原に嶋宅を営む。
 - 3) 蘇我氏の飛鳥盆地内進出の背景：「今来漢人」による飛鳥盆地内の開発があった。
 - 4) 蝦夷の邸宅：豊浦家、畝傍山東家・甘檜丘の上宮門。
 - 5) その子・入鹿の邸宅：甘檜丘の谷宮門がある。嶋宅も継承。
 - 6) 畝傍山東麓～飛鳥の地：6世紀中頃～7世紀中頃、蘇我本宗家の本拠地であった。

7、推古天皇、豊浦宮に即位：593年。馬子が飛鳥寺造営中。

- 1) 豊浦宮：飛鳥に都が集中する契機となった、飛鳥時代の幕開けを告げる宮殿。
- 2) 推古天皇の系図：父は欽明天皇、母は堅塩媛。稻目と馬子は外祖父と叔父。
- 3) 豊浦の地：蘇我氏の重要な拠点の一つ。

①推古天皇による飛鳥への遷都・豊浦宮遷宮：馬子が大きく関わっていたはず。

8、飛鳥寺の造営と飛鳥衣縫造：

- 1) 崇峻元年(588)紀是年条：蘇我馬子は飛鳥衣縫造祖樹葉の家を壊して、飛鳥寺の造営を開始。蘇我氏のために宅地を提供。

①飛鳥衣縫部：雄略紀14年3月条に見える身狭村主青等が呉から将来した漢織(あはとり)、呉織(くぬとり)の衣縫を祖先とする東漢氏配下の今来才伎。

E、遣隋使・遣唐使百済亡命渡来人

1、推古16年(608)：聖徳太子は隋に初めて留学生・僧を派遣。

- 1) 狙い：最先端の文物、制度、技術を直接導入して、新しい国家体制の確立を目指す
- 2) 留学生と留学僧：東漢直福因・奈羅訳語恵明・高向漢人玄理・新漢人大国(留学生)、新漢人日文(旻)・南淵漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人広斉(留学僧)。

①大半：漢人・新漢人が占めた。語学と素養が必須であったから。

2、遣唐留学生・僧：書直麻呂、東漢長直阿利麻、東漢草直足嶋など渡来系の姓の者。

- 1) 遣唐使の随員：訳語・医師・陰陽師・楽師・画師・鍛生・鑄生などの技術者も渡来系が中心。

3、学生・僧の帰国：隋唐で長い留学生活を送る。

- 1) 旻：舒明4年(632)に帰国。
- 2) 南淵請安、高向玄理：舒明12年(640)に新羅経由で帰国。
- 3) 留学僧：仏教だけでなく、広い範囲の学問を修してきた。

①僧旻：中国の祥瑞思想を学び、緯書を持ち帰り、天文の異変や祥瑞の出現に際し白雉改元など朝廷に中国的解釈を教え(舒明・孝徳紀)、また、諸氏の子弟に周易を講じた(大織冠伝)。

②南淵請安：儒学を講じ、中大兄皇子、中臣鎌子は周孔の教えを学んだ(皇極紀)。

- 4) 大化のクーデター後：高向玄理と旻は「国博士」となり、政治顧問として大化後の政治に具体的な形を与える。

①留学生・留学僧：多方面で活躍し、文化水準を高める原動力となる。

F、百済亡命渡来人

1、661年：白村江の戦い。百済、唐・新羅連合軍によって滅亡。

- 1) その前後：多数の百済人が亡命。
- 2) 亡命者：百済王朝の高位者で高い教養・学識・技能を身につけた者が多数。
- 3) 高い知識人の多数流入：渡来人の歴史上画期的なこと。
- 4) 律令国家建設期にあたるこの時期：中国的な制度・文物の整備が急務。

①亡命百済人の知識・技能：極めて貴重なもの。

2、亡命渡来人：余自信・沙宅紹明(法律)、鬼室集斯・許率母(学術)、谷那晋首・木素貴子・憶礼福留・答焮春初(兵法・築城)、憶仁・徳自珍・鬼室集須・吉大尚・僧法蔵(医薬)、角福牟・僧法蔵・僧行心(陰陽道)、木素丁武・沙宅万首(呪禁)、僧道蔵(道教)など。

- 1) 彼ら：天智・天武・持統朝の政治、軍事、学芸、技術、医薬、陰陽など各方面で広く活躍。奈良時代の社会、文化形成の大きな原動力となる。

- 2) 天智天皇の子・大友皇子：彼らに師事し教育を受けるなど、亡命渡来人は教育面でも大きく貢献。

- 3、遣唐使中絶末期の持統・文武朝：渡来系僧侶を還俗させた例も多い。
 - 1) 律令制度総仕上げの時期：政治・学芸・技術等の陣容を整える必要があったから
 - 2) 一方：薩弘恪(唐人、音博士・大宝律令選定)、山田史御方(新羅僧、文章道)、大津首(高句麗人・陰陽道)など唐・新羅・高句麗からの渡来者もあった。
 - ①百濟亡命渡来人と同様に各方面で活躍。
- 4、天智7年(668)：新羅との国交が再開。
 - 1) 新羅からの調進使、遣新羅使、学問僧の派遣：彼我の往来が頻繁になってくる。

G、仏教文化と渡来人

- 1、飛鳥文化を最も特色づけるもの：渡来文化の代表とも言える仏教文化。
- 2、仏教公伝：戊午年(538)、百濟聖明王が欽明天皇に金銅釈迦仏像1体と幡蓋、経論を献じた時とされる(『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』等)。
 - 1) 公伝以前：大唐漢人鞍部村主司馬達止ら渡来氏族による私的信仰があった。
 - 2) 司馬達止：繼体16年(522)渡来の今来漢人。高市郡坂田原に住み、草堂を結んで仏像を安置して帰依礼拝したという(「扶桑略記」)。
- 3、公伝後の仏教：まず蘇我稲目によって崇拜された。
 - 1) 蘇我稲目：聖明王献上の釈迦像を譲り受け、小墾田家に安置して勤修し、また向原家を喜捨して寺としたという。
 - 2) 蘇我馬子：崇仏の志篤い。
 - ①敏達13年(584)：馬子は、鹿深臣らが百濟から持ち帰った弥勒石像などを祀るために司馬達止らに仏道修行者を捜させ、播磨国で高句麗出身の還俗僧恵便を探し出したという。
 - ②馬子は：恵便を師として司馬達止の娘嶋を善信尼として得度させ、漢人夜菩の娘豊女を禅蔵尼、錦織壺の娘石女を恵善尼として善信尼の弟子とさせた。
 - ③宅の東に仏殿を造って弥勒石像を安置し、石川宅に仏殿を造り石川精舎とした。
 - ④敏達14年：大野丘北塔を建てる。
 - 3) 崇仏・廃仏をめぐる蘇我氏と物部氏・中臣氏の抗争：
- 4、最初の本格的な伽藍寺院・飛鳥寺(法興寺・元興寺)の建立：蘇我馬子の発願。
 - 1) 崇峻元年(588)：物部守屋を滅ぼした直後。飛鳥寺(法興寺・元興寺)を建立。
 - 2) 飛鳥寺の性格：百濟の助言により僧の受戒寺院として計画されたもの。
 - 3) 造営：百濟より招聘の寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工等の工人の指導で造営。
 - ①『日本書紀』崇峻1年(588)：蘇我馬子の招きにより、飛鳥寺の建立に、百濟から造寺工・瓦博士・鑪盤博士・画工などが来朝。
 - 4) 多くの東漢氏や漢人の参画：山東漢大費直麻高垢鬼と意等加斯も造営の指揮にあたる(「元興寺露盤銘」)。
 - 5) 飛鳥寺塔の造営関係者：意奴弥首辰星(おしぬみのおびとしんしょう)・阿沙都麻首未沙乃(あさづまのおびとみさの)・鞍部首加羅爾(くらつくりべのおびとからに)・山西首都鬼(かぢのおびとつき)。

→百濟からの造寺工・鑪盤博士の指導の下に、塔の造営に従事した技術者。

 - ①意奴弥首辰星：忍海首。「新撰姓氏録」は仁徳朝来朝の漢氏系渡来人とする。
 - ②阿沙都麻首未沙乃：朝妻首。金工品の製作に従事する者が多い(正倉院文書)。
 - ③鞍部首加羅爾：鞍作氏の一族。鞍の製作、美術工芸品を手懸けた。
 - 6) 鞍作鳥の関与：推古13年(605)、推古天皇は銅・繡の丈六像などの造像を誓願。鞍作鳥を造仏工とする。
 - ①鞍作鳥：翌年、銅の丈六像を完成させて飛鳥寺金堂に安置したという。
 - ②最初の仏師：馬具製作という高度な金工の技術を具備した者の中から出現した。
 - 7) 鞍作氏：飛鳥時代開始期に造寺・造仏に深く関わり、仏教信仰の支持者となった
 - 8) 初期の造寺・造仏工、画工、瓦工：百濟や高句麗から渡来した工人であった。

- 5、飛鳥寺創建の単弁十弁蓮華文軒丸瓦：まさに百濟様式。
 - 1) 飛鳥寺瓦窯：扶余亭岩里瓦窯と同構造。百濟工人の関与を裏づける。
- 6、一塔三金堂の伽藍配置：高句麗様式。高句麗との結びつきも強い。
 - 1) 飛鳥寺の最初の僧：高句麗僧恵慈と百濟僧恵聡。
 - 2) 金銅丈六像造像にあたって：高句麗大興王が黄金320両を貢上したという。
- 7、飛鳥寺で僧官の制度が完備：
 - 1) 推古10年(602)：百濟僧觀勒が渡来して飛鳥寺に住む。
 - 2) 推古32年(624)：觀勒を僧正、鞍部徳積を僧都、阿曇連を法頭とし僧官が完備。
 - 3) 飛鳥時代の僧：多くが渡来僧か、渡来人出身。
- 8、渡来人と仏教文化との関わり：
 - 1) 推古18年(610)：高句麗から曇徴・法定が渡来。
 - ①曇徴：五経に詳しく、彩色・紙墨・碾磑(みうす)を造る。
 - 2) 推古30年(622)：聖徳太子の冥福を祈り、諸王子・諸臣は太子等身の釈迦如来像の造立を発願。鞍作首止利はこれを見事、完成させた(法隆寺金堂の金銅釈迦三尊像、光背銘文)。
 - ①止利：渡来人の3代目。釈迦三尊の光背銘に「仏師」と明記された最初の人。
 - 3) 「天寿国繡帳」：聖徳太子の死後、太子を追慕して妃橘大郎女が、東漢末賢(まけん)、高麗加西溢(こまのかせい)、漢奴加己利(あゆのかかり)を「画者」とし、棕部秦久麻(くらのたのくま)を「令者」(指導者)として作らせたもの。
 - 4) 「山口大口費(おぐちのあたい)」：法隆寺広目天像の造像者(同光背銘文)。
 - ①白雉元年(650)紀：漢(あ)山口直大口と同一人物。→百濟系漢人(あひと)の出身。→造寺・造像・仏画の製作に、東漢氏とその一族・配下が重要な役割を果たす。
 - 5) 道昭：白雉4年(653)入唐して玄奘に学び、661年に帰国して法相宗を伝え飛鳥寺東南禅院に住む。
 - ①700年に物故：遺言によって初めて火葬。
 - 6) 東大寺大仏の完成者、国中公麻呂：祖父国骨富は百濟亡命渡来人。
 - 7) 初期の仏教文化：渡来人によって大きく支えられていた。

H、学問・思想・芸術・技術と渡来人

- 1、「新しい渡来人」の活躍：思想・学芸・技術・医薬など多分野での活躍が著しい。
 - 1) 6世紀前半頃：「易経」「詩経」「書経」「春秋」「礼記」に詳しい五経博士が渡来。儒教の知識も伝わる。
 - 2) 学問や文字の教育：「論語」「千字文」「孝経」等が教材となる。
 - ①藤原宮跡等：「子曰 学而不…」等、「論語」「千字文」の字句の習書木簡が出土。
- 2、欽明14年(553)：百濟に医博士・易博士・曆博士の交代者の派遣と、卜書・曆本等の送付を要請。
 - 1) 翌年：医博士が送られてくる。
 - 2) 学問・技術等の専門職：この頃は、百濟に依拠していた。
- 3、日本での専門家の養成の開始：
 - 1) 推古10年：僧觀勒が「曆本、天文地理書、遁甲方術の書」を献上。
 - ①觀勒：陽胡史の祖玉陳に曆法、大友村主高聡に天文・遁甲、山背臣日立に方術を教えた。
 - ②推古20年渡来の百濟人味摩之：「吳」で学んだ伎楽舞にすぐれ、新漢齊文らを指導
 - 2) 日本での専門家の養成開始：学生は渡来系の人々が中心であった。
- 4、絵画・彩色技術の伝来：
 - 1) 飛鳥寺造営時：百濟の画工が派遣される。
 - 2) 推古12年：高句麗系の黄書画師と山背画師がその姓を賜る。
 - 3) 推古18年：高句麗渡来の曇徴は、五経に詳しく、彩色・紙墨・碾磑を造る。

- 4) 飛鳥寺や斑鳩寺・法隆寺の堂塔の壁画・彩画、高松塚古墳・キトラ古墳の壁画、経巻の製作など：高句麗系の黄書画師などやその後裔が関与したろう。
- 5、造園技術の伝来：渡来人の足跡や、渡来系要素が顕著。
 - 1) 推古20年：百濟渡来の路子工が小墾田宮南庭に須弥山と吳橋を築く。
 - ①吳橋：江南に多いアーチ形石橋。
 - ②須弥山：斉明紀にも三度登場。同6年、石上池辺に須弥山を造立。
 - ③石神遺跡出土の須弥山石：斉明紀に見える須弥山像。庭園の水飾り。
 - 2) 飛鳥時代の園池：嶋池などのように自然石を垂直に積んで護岸した方形池が主流
 - ①方形池の源流：百濟・新羅の園池に倣ったもの。
 - 3) 古宮遺跡の曲水庭園：7世紀前半。石組小池と曲溝。最古の曲水の宴用の園池跡
 - ①曲水の宴：古く中国に起源し、朝鮮半島を経て日本に伝えられたもの。
 - 4) 酒船石遺跡発見の亀形・小判形水槽遺構：斉明朝造営の水に関わる宮廷祭祀施設
 - ①その水槽や飛鳥京園池発見の石製水槽：新羅鴨雁池の水槽と類似。
 - 5) 亀形水槽：不老不死の仙境「蓬莱山」は亀に支えられているという道教の神仙思想に基づくもの。
 - ①同じ思想背景：唐大明宮太液池や鴨雁池で、蓬莱山・方丈山・瀛州山の三神山に擬えた中島を設けて道教的神仙世界を作ることと共通。

I、新技術の伝来・展開

- 1、孝徳・斉明・天智朝：遣唐使の頻繁な派遣など唐との交渉が盛んな時期。
- 2、中国系新技術導入上：大きな画期。
 - 1) 斉明6年(660)：中大兄皇子による漏刻の初造。
 - 2) 天智10年(671)：近江大津宮での漏刻設置。
 - 3) 天智5年：東漢氏出身の僧知由の指南車献上(斉明4年製作)。
 - 4) 天智9年：水碓利用の製鉄炉製作。
 - 5) 天智10年：黄書本実による水臬(建設用の水準器)の献上。
 - 6) 漏刻の製作：天文学や水力学など最先端の知識・科学技術が不可欠。飛鳥水落遺跡はその実態を伝える。
 - ①歴史的意義：「朝参時刻制」など唐の時刻制度・政治制度の導入を意味。
 - 7) 黄書本実：唐で仏足石を写して持ち帰る(「仏足石記」、水臬も唐からの将来か。
 - ①本実：持統8年(694)鑄銭司に任ぜられている。「富本銭」は彼の知識によって製作された可能性が高い。
 - ②「富本銭」「和同開珎」の方孔円形や径2.4cmの大きさ、鑄造方法：唐の「開元通宝」と共通。
 - ③「富本銭」の「七曜」や「富本」：陰陽五行など古代中国の思想に由来。
 - ④持統・文武天皇の火葬葬儀での責任者。
- 3、宮殿・寺院などの土木建設工事：渡来人は指導者等として大きな役割を果たす。
 - 1) 舒明11年(639)の最初の天皇発願寺院・百濟大寺の造営：書直県が大匠となる。
 - ①北魏洛陽永寧寺、百濟弥勒寺、新羅皇龍寺など6・7世紀の諸国国寺：鎮護国家仏教の象徴として九重塔の建造が盛行。
 - ②百濟大寺：それに倣い巨大九重塔を建立。
 - ③後の大官大寺：九重塔は国家筆頭大寺の象徴となる。
 - ④書直県：白雉元年に安芸国に派遣されて百濟船2隻を建造。百濟系の優れた建築技術を有していたのであろう。
 - 2) 孝徳朝の難波長柄豊碕宮：東漢直荒田井比羅夫を将作大匠に任命。
 - 3) 平城京：坂上直忍熊を大匠に任命。
 - ①東漢氏一族の優れた土木技術力：後代まで継承された。

4、鎮護国家仏教への展開と渡来人：

- 1) 斉明6年(660)：鎮護国家の法会「仁王会」が修せられる。
- 2) 天武・持統朝：飛鳥や諸国で「金光明経」「仁王経」を盛んに読誦させる。
- 3) 鎮護国家仏教政策：飛鳥三大寺を中心に大きく展開し始める。
- 4) 百濟大寺の造営：その出発点。
- 5) 天智天皇発願の川原寺：初めて唐様式の複弁蓮華文軒丸瓦を使用。

①仏寺の唐風化：まず官寺から始まる。

5、道教思想に基づく、陰陽五行思想、陰陽道、風水思想：宮廷生活の中に定着。

- 1) 天武4年までに：陰陽寮も設置されている。
- 2) 都城や墳墓：風水思想、陰陽五行思想に基づいて造営されるようになる。
- 3) 藤原宮：四神に見立てた大和三山に囲まれた中にあり、その地は陰陽師によって風水に適った場所との視占を経て選定された。
- 4) 平城京：北・東・西の三方を山に囲まれており、それは「四禽凶に叶い、三山鎮を作し、亀筮並に従う」都城建設の適地として選定された。
- 5) 終末期古墳の大半：北・東・西の三方を丘で囲まれ、南に谷や低地を望む地に造墓されている。風水思想によるもの。
- 6) 渡来人やその後裔：陰陽師として視占に大きな役割を果たした。
- 7) 皇極元年(642)：殺牛馬・移市・河神祈願による請雨も中国道教の祈雨の習俗。

①祈雨の指導にあたった祝部：飛鳥周辺の渡来系氏族であったろう。

- 8) 大祓：東文部(東文忌寸、書直)と西文部とが大祓刀を奉り、漢音で祓詞を読むなど重要な役割を果たした。

①藤原京など出土の馬牛形・人形・刀形・呪符木簡：道教的儀礼の定着を物語る。

6、医薬関係：

- 1) 欽明朝：和薬使主が薬書を持って来朝。
 - 2) 孝徳天皇の時：和薬使主の子の善那使主は牛乳を献上して和薬使主の氏姓を賜る
 - 3) 雄略朝に百濟から渡来した徳来(の)5世の孫恵日：遣隋留学生として漢方の医術を学び、薬師の姓が与えられている。
 - 4) 天武・持統朝：外薬寮(令制の典薬寮)・内薬官・医博士・呪禁博士が見える。
 - 5) 典薬寮：医・針・按摩・呪禁・薬園を担当し、師・博士・学生が所属。
- ①乳製品：薬餌。その加工・管理は典薬寮の仕事。

- 6) 律令国家の医療：漢方の医薬と共に道教的な呪的医療が中核を担っていた。

7、食事法：唐風化等が顕著になる。

- 1) 索餅・唐菓子等の粉食、牛乳、蘇・酪等の乳製品、油脂の使用：新伝来の漢法の食品や料理法。
- 2) 金属製の碗・箸匙を使う食事法：6世紀以降に朝鮮半島から貴族文化の一環として伝来し、支配者層の間に広まる。
- 3) それを写した土器や木箸：宮都での役人層等の食器として普及。

8、織物関係：

- 1) 雄略朝渡来の漢織・呉織・衣縫、その後裔の飛鳥衣縫造など「今来才伎」の活躍。
- 2) 高松塚古墳壁画や天寿国繡帳のスカート衣裳：繡帳の下絵を渡来人が描いているように、朝鮮半島の衣服の系統をひく。
- 3) 革帯：唐様式の衣服制を採用したもの。707年に始まったという(「扶桑略記」)。

①帯金具や石帯の出土：藤原宮跡では未発見。平城京で顕著になる。

J、まとめ

- 1、飛鳥文化：政治・思想・宗教・技術等が相互に深く関わって形成されたもの。
- 2、その形成・展開：先進的な様々の知識・技術を総合的に身に付けた渡来人の活躍に拠るところ大であった。
- 3、律令制下の知識・技術伝承、教育：師－博士－学生。渡来人後裔が大きな役割果たす
- 4、律令制下の手工業生産：渡来系技術者を再編成。

《渡来人の寺》

A、渡来系氏族の寺院の要素

- 1、輻線文縁複弁蓮華文軒丸瓦：東漢氏系寺院と関連。
- 2、瓦積基壇：源流は百濟寺院にある。
- 3、瓦積基壇の分布：滋賀穴太廃寺再建金堂、京都大鳳寺、奈良桧隈寺講堂、同巨勢寺鳥取上淀廃寺金堂・中塔・南塔など。滋賀県に多い。
 - 1) 地覆に花崗岩や玉石を敷き、半截平瓦を平積みした瓦積基壇：滋賀崇福寺弥勒堂同南滋賀廃寺塔・中金堂・西金堂、同穴太廃寺再建金堂、京都高麗寺塔・金堂鳥取大寺廃寺金堂・講堂、同上淀廃寺金堂など。
 - 2) 地面に直接、半截平瓦を平積みした瓦積基壇：桧隈寺講堂など。

B、大和の渡来系氏族寺院の分布

- 1、主要な分布：飛鳥、奈良盆地の東山麓、王寺町周辺、葛城地域。
- 2、奈良盆地の東山麓：山村廃寺・楢池廃寺・長寺・平等坊廃寺。
 - 1) 山村廃寺：塔は瓦積基壇。百濟系渡来氏族の山村許智氏の氏寺。
 - 2) 楢池廃寺・長寺・平等坊廃寺：山村廃寺式軒丸瓦が出土。
 - 3) 平等坊廃寺：新羅系瓦が出土。
- 3、王寺町周辺：片岡王寺、西安寺。
 - 1) 片岡王寺、西安寺：7世紀前半の創建。法隆寺所蔵の銅板造像銘に記載のある、百濟王(ひき)氏の一族の大原氏の氏寺である可能性がある。
 - 2) 尼寺廃寺：創建瓦は坂田寺と同範。南西750mにある平野塚穴山古墳は百濟陵山里古墳群と石室構造が類似。渡来系氏族の氏寺である可能性も考慮される。
- 4、葛城地域：地光寺・朝妻廃寺。
 - 1) 葛城山麓：渡来人の居住を示す遺構や遺物の存在。
 - ①渡来系遺物を出土する古墳、渡来系の石室構造をもつ古墳の濃密な分布地。
 - ②鍛冶工房や大壁住居の存在、韓式系土器の出土。
 - 2) 地光寺：薬師寺式の東伽藍と、西伽藍。東漢氏配下の忍海(しめ)氏の氏寺か。
 - ①東伽藍：新羅系鬼面文軒丸瓦が出土。雷丘北方遺跡例より形式化が進む。
 - ②西伽藍：葡萄唐草文軒平瓦と複弁5弁蓮華文軒丸瓦(岡寺式)。
 - ・岡寺式：渡来系氏族の市往(いちゆき)氏出身の僧義淵創建の岡寺で最初に採用。
 - ・葡萄唐草文軒平瓦の系譜：新羅に求められる可能性もある。
 - 3) 朝妻廃寺：冶金などに携わった氏族の朝妻氏の氏寺。飛鳥寺造営にも関与。
 - ①伽藍：東面する法隆寺式。7世紀後半の造営。
 - ②創建瓦：川原寺系の複弁7弁蓮華文軒丸瓦。紀伊佐野廃寺と同範。
→考古学的には渡来人の寺とする証拠はない。

C、飛鳥の渡来系氏族の寺院

- 1、飛鳥の古代寺院：30ヵ所以上。
- 2、渡来系氏族寺院：坂田寺(鞍作氏の氏寺)、檜隈寺(東漢氏主流の檜隈忌寸の氏寺)、立部寺(定林寺、平田氏の氏寺)、軽寺(軽忌寸か高向村主の氏寺)、大窪寺(渡来系の大窪史の氏寺)・呉原寺(呉原忌寸の氏寺)、高田廃寺など。
 - 1) 檜隈寺：輻線文縁複弁蓮華文軒丸瓦(東漢氏系寺院と関連)、講堂の瓦積基壇。
- 3、坂田寺：鞍作氏の氏寺。
 - 1) 創建：推古14年(606)、仏師鞍作鳥、飛鳥寺金堂に祀る金銅丈六像を造像。堂内に安置する時、鳥は、機知を働かせ、扉を壊さず搬入することに成功。
 - ①鳥：その功により近江国坂田郡に水田20町を賜り、その収穫をあてて坂田寺を造営。金剛寺という。

2) 鞍作氏：

①鳥の祖父：鞍部村主司馬達等。大野丘北塔に祀る仏舎利を入手。蘇我馬子のすすめで、その娘の嶋を出家させる(日本最初の尼・善信尼)。

①鞍作賢貴(けんき)：5世紀に東漢直掬(やまとのあやのあひつか)に率いられ、飛鳥の地に移住した渡来技術者。鞍部村主司馬達等との関係は不明。

3) 伽藍建物：8世紀の金堂・講堂など中枢伽藍の一部と東回廊が判明。7世紀前半の遺構は、その北西部の一段低い場所で発見されている池状施設と軒瓦など。

4) 奈良時代以前の瓦：軒丸瓦24種、軒平瓦9種。

5) 創建瓦：飛鳥寺創建瓦時の花組に酷似するが、他の寺と同範関係にあるものはない。坂田寺創建用に作範されたものか。

①飛鳥寺の造瓦工房の援助を受けて瓦作りが開始されたらしい。

6) 7世紀中葉以降の瓦：坂田寺式軒丸瓦(特異な重弁式)。

①同範：尼寺廃寺、愛知篠岡2号窯と東畑廃寺。

②類例：大和奥山廃寺、和歌山西国分廃寺・北山廃寺・最上廃寺・山口廃寺など。

7) 善正寺式軒丸瓦：百濟益山弥勒寺例と類縁性がある。

①羽曳野市善正寺：善正寺式軒丸瓦A・B・Cが順次展開。同野中寺にC、藤井寺市葛井寺にA・Cが出土。

②善正寺、野中寺、葛井寺：辰孫王の後裔と称する百濟系氏族の氏寺。

③坂田寺での善正寺式軒丸瓦の存在：渡来系氏族との密接な関係を物語る。

4、桧隈寺：東漢氏の中核、桧隈氏の氏寺。

1) 創建：7世紀前半、小規模な仏殿のみの寺院として始まる。

2) 7世紀初頭～8世紀代の瓦：軒丸瓦15種、軒平瓦6種。

3) 創建瓦：7世紀初頭。立部寺(東漢氏の氏寺)に酷似例あり。

4) 蓮弁上に複子葉と花卉の縞を細線で現した軒丸瓦：

5) その系譜に連なる単弁重弁で花卉の縞を細線で現した軒丸瓦：呉原寺、広島県横見廃寺・明官地廃寺・山王社境内瓦窯に同範瓦がある。

①大和と安芸：丸瓦の接合技法が異なる。大和から範のみが伝えられた。

②背景：白雉元年(650)に造船に携わる目的で派遣された倭漢直県を介して、範が地元豪族の氏寺建立に際しもたらされた可能性が想定される。

6) 再建伽藍：7世紀後半の川原寺創建と同じ頃、大規模整地と金堂・中門の造営。

①伽藍整備：7世紀末、藤原京時代(塔・講堂を完成)。

②伽藍配置：他に類を見ない特異な伽藍配置。

③金堂：輻線文縁複弁8葉蓮華文軒丸瓦を用いる。

④輻線文縁の類例：大窪寺以外に飛鳥周辺では類例がない。近江を中心に分布。渡来系氏族の寺に特有の新羅系文様とされる。

⑤講堂：飛鳥唯一の瓦積基壇。

6) 輻線文軒丸瓦・瓦積基壇：渡来系氏族の氏寺特有の考古資料として注目される。

5、立部寺(定林寺)：塔と推定金堂、回廊が判明。

1) 7世紀～8世紀の瓦：軒丸瓦4種、軒平瓦4種。

2) 創建：飛鳥寺星組に酷似。技法は花組に類似。飛鳥寺瓦工房と密接な関係を示す

3) 所在地：東漢氏の本拠地桧隈の範囲内の平田。

4) 「姓氏録」：阿知王―都賀使主―山木直とあり、山木直を祖とする25姓の中に、平田宿禰・平田忌寸・軽忌寸・高田忌寸などがある。

5) 立部寺：平田氏の氏寺とする説が有力。

6、軽寺：金堂と塔の推定地がある。

1) 7世紀～8世紀初頭の瓦：軒丸瓦3種、軒平瓦5種。

2) 創建期の軽寺式軒丸瓦：百濟末期様式。扶余の王興寺・金剛寺にやや似た例あり

①軽寺式：和泉坂本寺・池田寺、尾張長福寺、伊予法安寺等に分布。相互関係不明
3) 軽の地名に因む氏族名：皇別に「軽部臣・軽部朝臣」「軽我孫」があり、東漢氏の一族に「軽忌寸」がある。

4) 『和州旧跡幽考』(延宝7年=1679)が引く縁起：「賀留(かろ)大臣玄理(高向漢人玄理)」創建説が見える。

①阿知王に率いられた漢人の中：「高向村主・高向史・高向調使」がある。

5) 軽寺：「軽忌寸」か「高向村主」の氏寺だろう。

6) 朱鳥元年紀(686)8月条：桧隈寺・軽寺・大窪寺(渡来系寺院)に封100戸を与える

7、大窪寺：塔跡。

1) 640年前後～8世紀初頭の瓦：軒丸瓦10種、軒平瓦2種。

2) 創建期の軒丸瓦：斜めの輻線文縁単弁8弁蓮華文。

3) 輻線文縁複弁蓮華文軒丸瓦：桧隈寺と同範か。

①大窪寺が渡来系氏族の大窪史の氏寺であるとする根拠。

②大和大窪寺：渡来系の大窪史の氏寺説(福山敏男)。

8、呉原寺：伽藍配置など不明。

1) 奈良時代以前の瓦：軒丸瓦5種、軒平瓦3種。

2) 単弁重弁で花弁の縞を細線で現した軒丸瓦：桧隈寺、広島県横見廃寺・明官地廃寺・山王社境内瓦窯に同範瓦がある。

3) 呉原忌寸：東漢氏一族。

4) 「清水寺縁起」：竹林寺(栗原寺)は、坂上田村麿の「先祖従二位駒子卿」が敏達天皇のために建立したとする。

5) 性格：地名から呉原氏の氏寺とみてよい。

《桧隈寺》

A、位置・立地

1、位置・立地：飛鳥の西南部の丘陵地帯。高松塚古墳の南で、「王家の谷」と呼ばれる天皇家の陵園の地の南側。南から北に延びる狭い丘陵尾根上の先端近くに立地。

2、現状：東漢氏の祖先、阿知使主を祀る於美阿志神社境内地。

1) 残存遺構：塔の礎石、金堂の土壇、講堂の土壇と礎石、中門の土壇と礎石。

2) 宣化天皇の桧隈廬入(いかり)野宮(536～539)の伝承地。

3、発掘前の伽藍配置説：土壇の配置、周辺地形から南面する伽藍と推定。

1) 法起寺式、ないし観世音寺式説：東に塔、西に金堂。

2) 薬師寺式説：東西に2塔が並ぶ伽藍を想定。

B、発掘：昭和54年から継続発掘。

1、成果：特異な伽藍配置をもつ寺院であることなど特徴を明らかにする。

2、中門推定地の発掘：

1) 位置と調査前の状況：境内の南端で、塔跡の南にある。中門としては高い土壇。

2) 建物：東西5間(13.9m)×南北4間(11.4m)の四面廂付の東西棟の堂跡と判明。

①柱間寸法：1尺=30.3cmとして、身舎桁行9尺等間・梁行9.3尺、廂9.5尺等間。

②正面長：側面長=1.22：1。

③法隆寺金堂との比較：間口はほぼ同大、奥行はやや広い。

→飛鳥時代金堂としては、一般的な規模。

3) 礎石：円形柱座を造り出した入念な加工を施した礎石がよく遺存。

4) 基壇：二重基壇。尾根上の地山を削り出し、その上に版築して築く。

①上成基壇：東西16.3m、南北13.9m、高さ1.15m。木製の基壇化粧か？。

・側柱からの出：0.8mと著しく狭い特色がある。

②下成基壇：東西17.9m、南北15.5m、高さ0.15m。
・上面に川原石を敷き詰め(幅1.1m)、その外縁に川原石を立て並べて化粧。

③類例：飛鳥寺東西金堂、川原寺西金堂の技法に通ずる。

5) 基壇外装の特色：

①飛鳥寺、川原寺の中金堂や塔、山田寺堂塔など：一級寺院では、切石による壇上積基壇化粧を採用。

②桧隈寺金堂や格が低い講堂など：より簡素な基壇化粧法を採用。

6) 階段：下成基壇の南北辺の中央の石敷が抜けている。

①階段幅：桁行中央間と同じ2.72mの階段が取りつく。

7) 回廊：下成基壇の東西辺の中央の石敷が抜けている。

①幅：3.75m。単廊が取りついたものと思われる。

8) 建物の性格：中門とは考え難い。

①平面形・規模・入念な加工を施した礎石の配置：金堂跡と考えられる。

9) 特異な点：廂の柱間寸法が9.5尺で、身舎の柱間(桁行9尺、梁行9.3尺)よりも広い点。他に例を見ない特異なもの。

3、塔基壇：版築で築く。

1) 塔の初層規模：一辺25尺(8尺・9尺・8尺)。

2) 心礎：基壇上に据える。花崗岩の巨石を加工した精巧なもの。

①円形に彫り凹め、心柱を受ける。周囲に瓦積みを巡らす(藤原宮式軒瓦を含む)。

3) 屋根瓦：藤原宮式。

4) 十三重石塔：心礎上に立つ。舍利を埋納。11～12世紀。

4、講堂：

1) 建物：東西7間×南北4間の四面廂付の東西棟。

①規模：29.4m(100尺)×15.3m(52尺)。1尺=約29.4mとして。

2) 礎石：長大な花崗岩自然石を使用。

②竜山石製の石棺式石室の底石(?)を転用した礎石あり。

3) 基壇：瓦積基壇。藤原宮式軒瓦を含む。

4) 屋根瓦：藤原宮式軒瓦で葺く。

5) 瓦積基壇の類例：畿内では高麗寺廃寺、田辺廃寺など渡来系氏族の氏寺に多い。

①朝鮮半島：百濟定林寺、扶蘇山廃寺、軍守里廃寺など多くの例があり、

②日本での採用：渡来人が関与したと推定できる。

5、中門と回廊：

1) 中門：塔の西方。大きく削平を受けているが、基壇と一部の礎石が遺存。

2) 規模：東西3間×南北3間の南北棟建物。重層の中門。

3) 回廊：全容は未確認。中門の南北に単廊が取りつく。桁行3.7m、梁行3.6m。

①塔の東方：回廊(単廊)の一部を確認。

C、伽藍配置

1、特異な伽藍配置：西が正面。

1) 配置：中門を入ると、前に塔、南(右手)に金堂、回廊外の北(左手)に講堂。

2) 類例：定林寺(平田氏の氏寺)。

①東が正面となる違いはあるが、桧隈寺と同様の伽藍配置であった可能性がある。

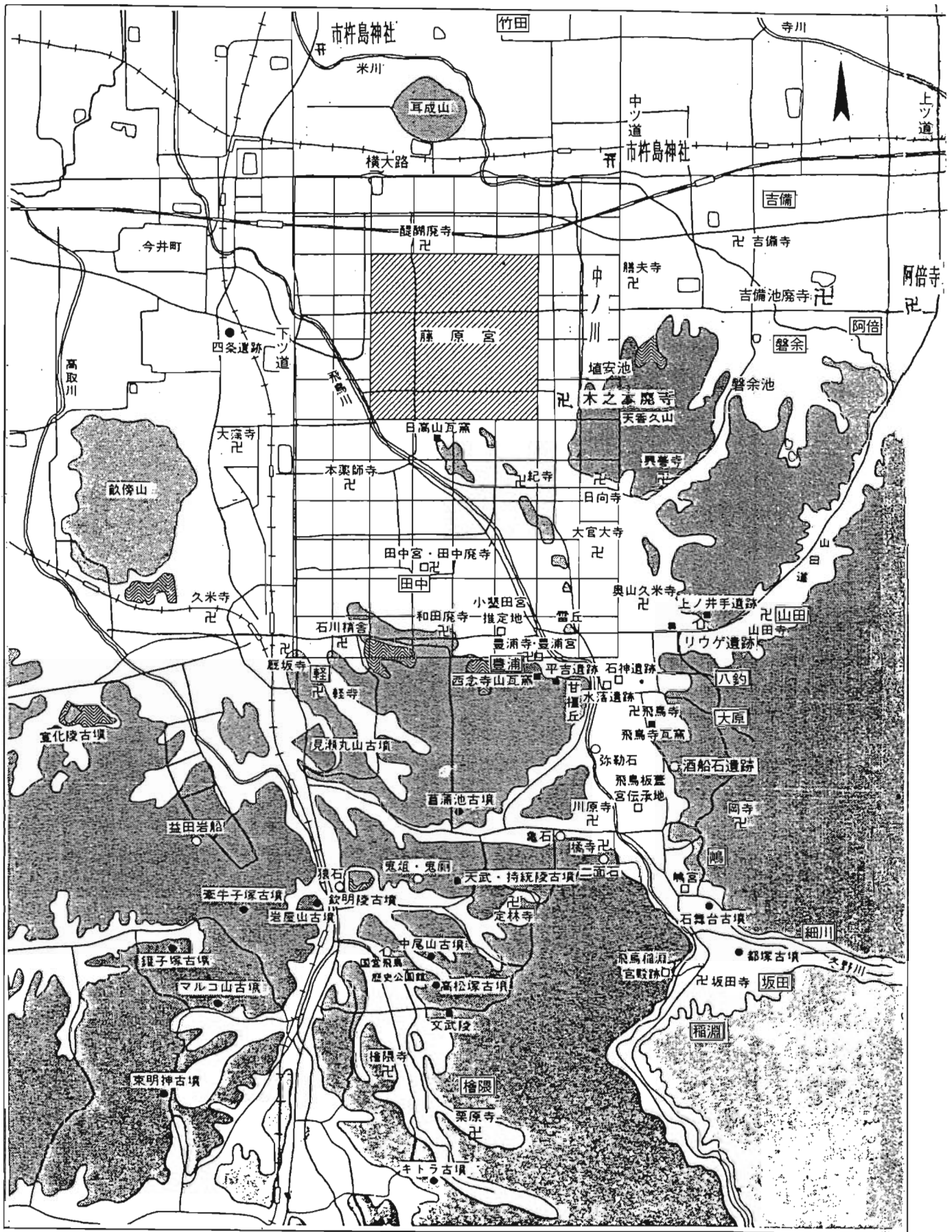
2、特異な伽藍配置をとる理由：丘陵先端の狭い平坦地に立地する地形に制約された。

1) 講堂付近の旧地形：西半分は谷地形を大規模に埋めたてて基壇を築く。

①旧地形：現状よりも一層狭長な尾根地形。大規模な造成工事。

D、創建

- 1、『日本書紀』朱鳥元年(686)：輕寺、大窪寺と共に30年を限り、封戸100戸が皇室から贈られている。皇室が経済的な支えをした。
 - 1) 桧隈寺：この時に存在したことは確実。
- 2、発掘成果から見た桧隈寺の歴史：各堂塔の所用瓦の様式から復原。
 - 1) 最初の造営：金堂と中門。
 - ①所用瓦：7世紀後半。川原寺の創建瓦に近いが、やや後出のもの。
 - ②造営：天智天皇ないし天武天皇代の早い時期に造営。670～680年頃。
 - 2) その後：造営を一時中断。
 - 3) 塔・講堂の造営：7世紀末の藤原京時代に造営。主要堂塔がようやく揃う。
- 3、前身寺院の存在：
 - 1) 7世紀前半に遡る軒丸瓦：相当量出土。
 - 2) 意義：本格的に伽藍を整える以前に前身の仏堂があった。遺構は未発見。
- 4、桧隈寺の歴史：
 - 1) 7世紀前半頃：飛鳥の西南部に定住した東漢氏の各氏族は、夫々の居住地に小寺院を建立し始める。
 - 2) 桧隈寺：最初はこの小寺院の一として成立。
 - 3) 東漢氏の危機：
 - ①桧隈寺の歴史：7世紀中頃以降における東漢氏の置かれた歴史的立場との関連で考えなければならない。
 - ②東漢氏：度々、政治の舞台に登場。都づくりなどで勝れた技術を発揮。
 - ③蘇我氏と連携：そのブレンとなった。
 - ④大化のクーデター：蘇我本宗家に従う。
 - ⑤蘇我本宗家の滅亡：東漢氏に大きな打撃を与えた。
 - ⑥蘇我氏と共に隆盛してきた東漢氏：その中心を失い、没落の危機をむかえる。
 - ⑦天武6年(676)：壬申の乱後、推古天皇以来、7つの大罪を犯してきたと、天皇から厳しく叱正を受ける。
 - 4) 桧隈寺の造営：
 - ①東漢氏の各氏族：存亡の危機を乗り切ろうと、桧隈氏を中心に氏族の結束を図る
 - ②桧隈寺の伽藍計画：こうした情勢の下に、氏族の結束の象徴として造営を開始したのではなかったか。
 - ③686年の封戸100戸の贈与：国家は援助する一方で、統制の強化を図ったもの。
 - ④塔・講堂の造営：このような大きな情勢変化の中で、造営された。
 - 5) 桧隈寺の複雑な造営経過や伽藍の特徴の意味：東漢氏が7世紀の政治の舞台で大きく動揺したことと無関係ではない。
- 5、地方寺院との関係
 - 1) 東漢氏：直姓を与えられている。国造など地方豪族とほぼ同等の処遇を受けた。
 - 2) 桧隈寺の特徴や造営経過：地方寺院の成立や構造を考え時、比較材料となる。
 - 3) 桧隈寺の寺格：『日本書紀』に登場し、また「道興寺」の法号を持つ。
 - ①地方豪族の氏寺よりも、格上であったのだろう。



1、飛鳥・藤原地域の宮殿・寺院・古墳の分布

寺院名	法号・その他	所在地	造営氏族・その他
山田寺	浄土寺	桜井市山田	蘇我倉山田家（石川麻呂）
飛鳥寺	法興寺	高市郡明日香村飛鳥	蘇我本宗家（馬子）
豊浦寺		豊浦	蘇我本宗家（毛人）
奥山久米寺		奥山	
雷廃寺		雷	
坂田寺	金剛寺	坂田	鞍作氏
立部寺	定林寺	立部	平田氏（?）
桧隈寺	道興寺	桧前	東漢氏
栗原寺	竹林寺	栗原	呉原氏
橘寺	菩提寺	橘	
岡寺	龍蓋寺	岡	市住氏（岡連）
軽寺	法輪寺	橿原市大軽町字寺垣内	軽忌寸
ウラン坊廃寺		石川町字ウラン坊	
和田廃寺		和田町	葛城氏（?）
日向寺		南浦町	
丈六廃寺		久米町字丈六	
久米寺		久米町	
田中廃寺		田中町	
紀寺		高市郡明日香村小山	紀氏
大窪寺		橿原市大久保町字寺内	大窪氏
八木寺		八木町	
醍醐廃寺		醍醐町	
木ノ本廃寺		木之本町	
膳夫寺		膳夫字瓦釜	膳夫氏
吉備寺		吉備	吉備氏
阿部寺	崇敬寺	桜井市阿部	阿部氏（倉梯麻呂）
川原寺	弘福寺	高市郡明日香村川原	
大官大寺		小山	
薬師寺		橿原市城殿町	
	本薬師寺		

2、飛鳥・藤原京の古代寺院一覧表

1、飛鳥・藤原京の諸宮・諸寺関係略年表

552	欽明13	仏教伝来
584	敏達13	蘇我馬子、石川精舎を作る。
585	14	蘇我馬子、大野丘の北に塔を建つ。
588	崇峻元	飛鳥寺を作り始める。
593	推古元	推古天皇、豊浦宮に即位
603	11	小墾田宮に遷る。
606	14	鞍作止利、坂田寺を作る。
607	15	小野妹子を隋へ派遣する。
613	21	難波より京に至る大道を開く。
626	34	蘇我馬子死す。桃原墓に葬る。
630	舒明2	飛鳥岡本宮に遷る。
636	8	田中宮に遷る。
639	11	百済川のほとりに大宮と大寺（後の大官大寺）を作り始める。
640	12	百済宮に移る。
641	13	山田寺を作り始める。
643	皇極2	飛鳥板蓋宮に遷る。
644	3	蘇我蝦夷・入鹿、家を甘樞丘に並べ起つ。
645	大化元	蘇我入鹿暗殺。 難波長柄豊碕宮に遷る。
649	大化5	山田寺で蘇我倉山田石川麻呂自害。
653	白雉4	中大兄皇子・皇極等と飛鳥河辺行宮に遷る。
655	斉明元	飛鳥板蓋宮火災。
656	2	狂心渠を作る。
659	5	甘樞丘の東の川上に須弥山を造る。
663	天智2	白村江の戦い。
667	6	近江大津宮へ遷都。
670	9	庚午年籍を造る。
672	天武元	壬申の乱 飛鳥浄御原宮に遷る。
680	9	薬師寺を興す。 橘寺出火、10房を焼く。 縄・綿・糸・布を京内24寺に施す。
681	10	周防国の献じた赤亀を嶋宮の池に放つ。
684	13	天皇、京師を巡行して宮室の地を定める。
689	持統3	浄御原令発布
691	5	藤原京地鎮祭
694	8	藤原宮遷都
700	文武4	僧道昭を栗原に火葬す。
701	大宝元	大宝津令完成。
710	和銅3	平城京遷都。
711	4	大官大寺等焼亡。

2、7世紀の屋根瓦



588 飛鳥寺



坂田寺



641 山田寺



川原寺

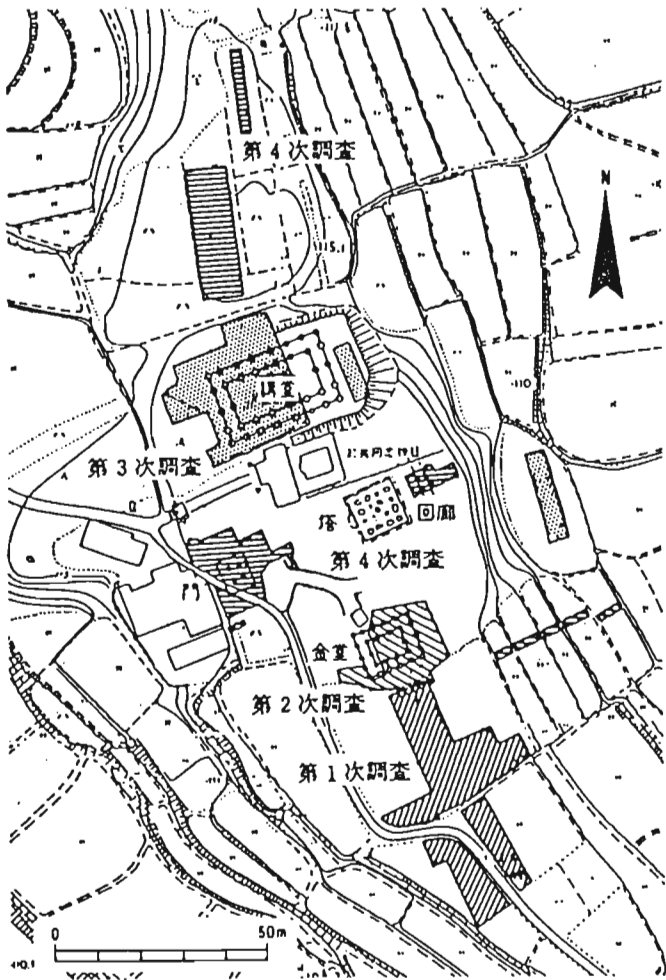


大官大寺

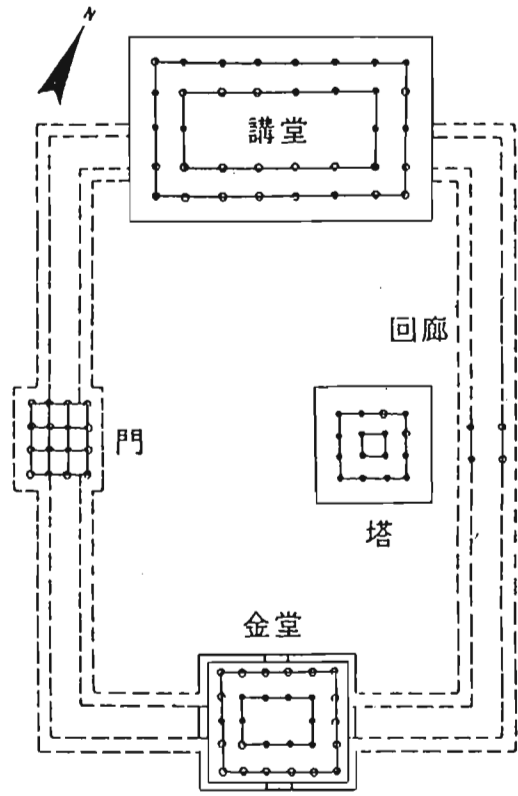


本薬師寺

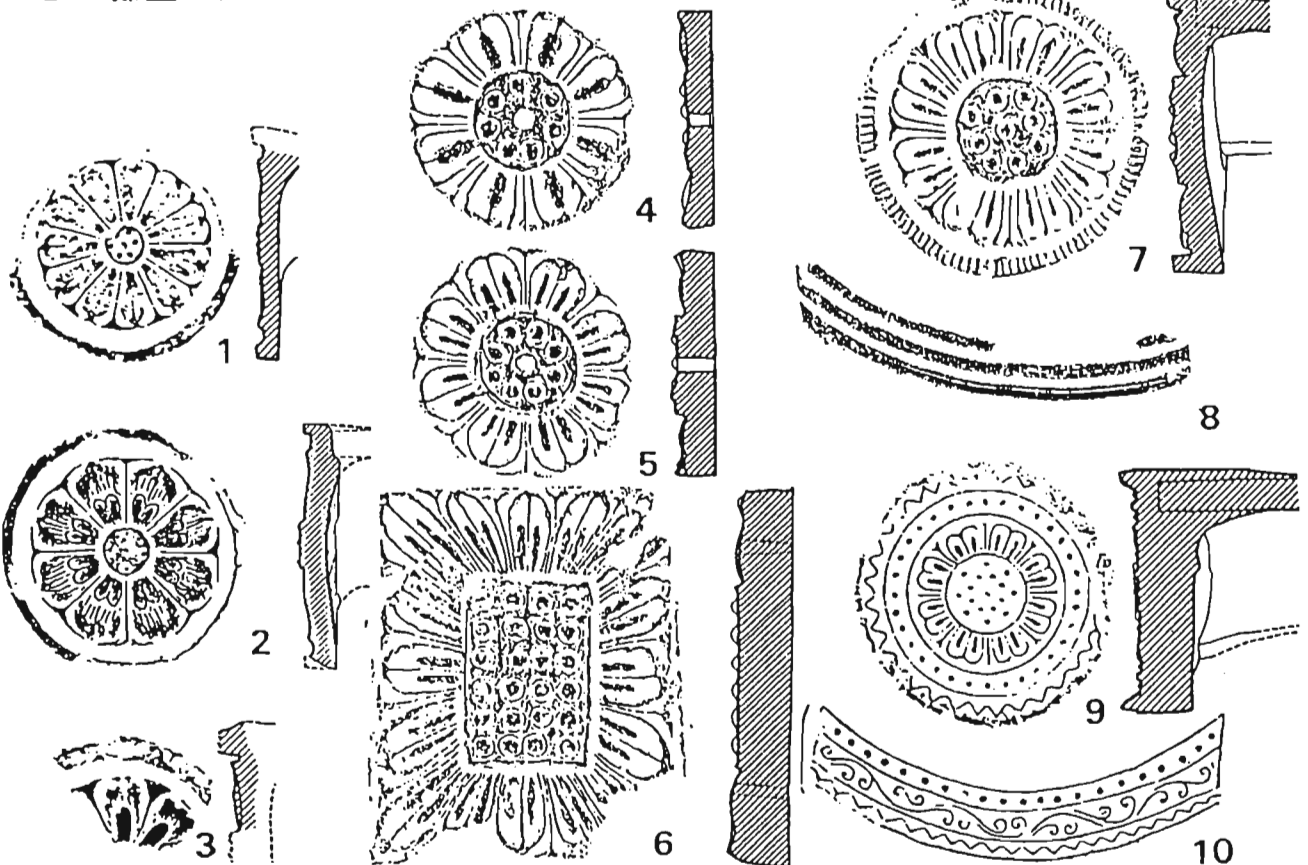
桧 隈 寺



1、伽藍と周辺地形



2、中心伽藍復原図



3、軒丸瓦・軒平瓦・垂木先瓦・尾垂木先瓦



1、 桧隈寺の金堂・塔



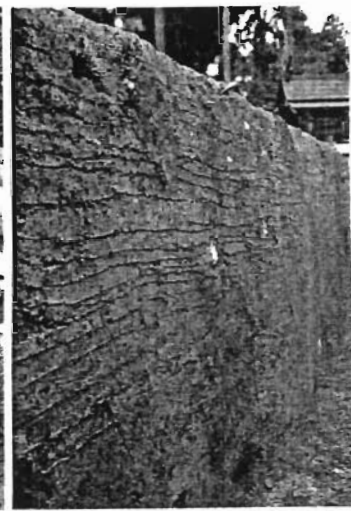
桧隈寺 金堂

2、 金堂跡



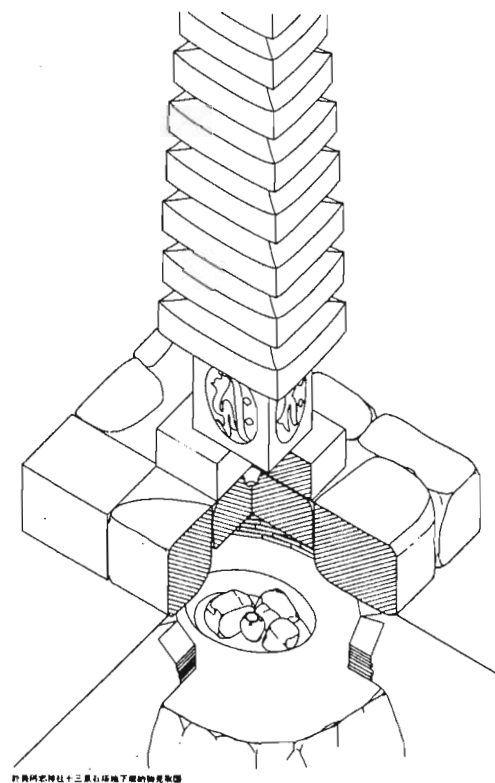
金堂下成基壇

3、 金堂の下成基壇



金堂基壇版築

4、 金堂基壇版築



伊勢神社十三重石塔下成基壇の断面図

5、 十三重塔



四耳壺 (厚胎物)

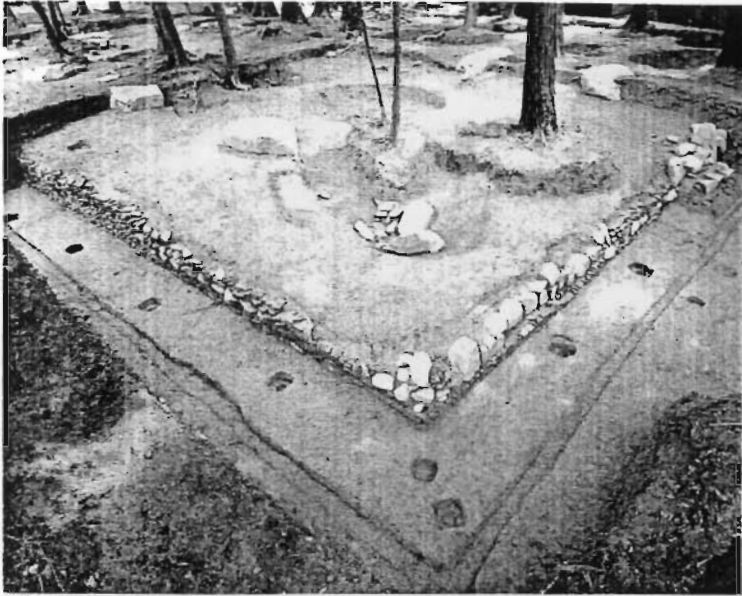


ガラス容器 (厚胎物)



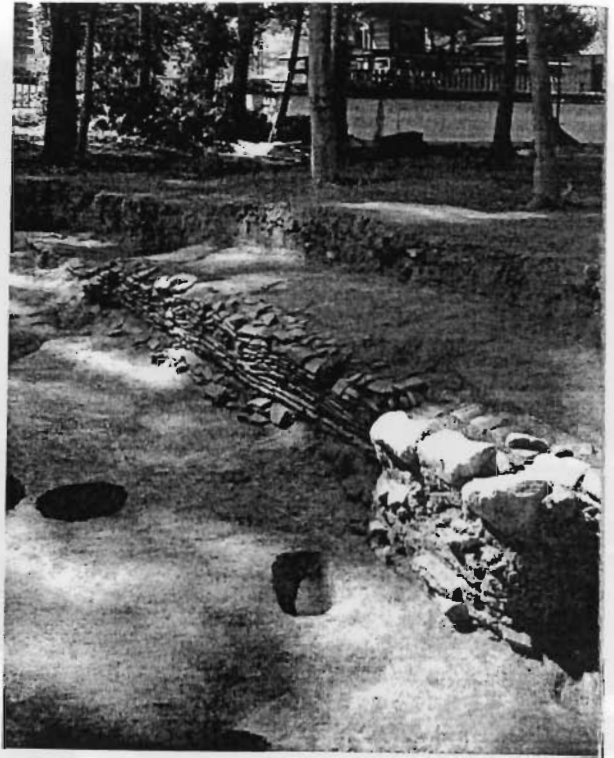
青白磁舎子 (厚胎物)

6、 十三重塔埋納物



楳原寺 講堂

7、講堂の礎石と基壇化粧



8、講堂の基壇化粧



9、講堂の瓦積基壇化粧



10、軒瓦と垂木先瓦

